小学校「生活科」科目の課題

松村晴路・杉原祥介
堤　孝彦・牧野淳子

The Problems about life Education in Primary School

Seiji Matsumura, Shosuke Sugihara,
Takahiko Tsutsumi and Junko Makino

Summary

In the Primary School will begin life Education as a new subject two years after.

The subject of life Education is very important to teaching about living affairs. But, what is Life Education of core-curriculum and how to teaching the subject. It is very difficult to teaching and to understand for young children.

In this study it is attempted to make a consideration on the problems about life Education.

Received Jan. 31, 1990

Key words : life Education, Core-Curriculum.

一　序

1．前提

平成元年3月15日告示された小学校学習指導要領の改訂の基本方針は，第一に，「社会の変化」に伴う児童の「生活構造（例，成熟社会）」や「意識」の変化に対応して（例，生涯教育）のものであり，第二に，21世紀社会（未来社会・国際社会）に向って，どの様に児童を育成してゆくかを目指したものである。

具体的には，第一に，「豊かな心」を持ち，「たくましく生きる人間」（例，豊かな体験・道徳性・自主的・主体性学習・生活する力）の育成を図ること。第二に，個性を生かす教育，自ら学ぶ意欲を身につけて，自分の物の見方・考え方・仕方（思考力・判断力・表現力・主張する力・抵抗権など）を育ててゆくこと。第三に，「社会」の変化（例，成熟社会・科学技術社会・高度情報社会などの発展・変化）に対応してゆける能力・「創造性」の能力等を高めてゆくこと。第四に，わが国の文化と伝統を学んで日本人としての自覚・見方・考え方を培うと共に，それによって外国の文化・伝統を尊重しつつ，地球全体・国際社会に共存して生きる一人の人間としての自覚・見方・考え方を学んでゆくこと。

に要約される。

以上を前提として，新設された「生活科」は，昭和40年代後半からの各種審議会における検討課題のまとめの具体化したものである[1]。新設科の発足は，昭和22年の「社会科」・「家庭科」以来であり，低学年においては7教科が6教科（社会・理科の廃止）になることであり，教科の改廃に関しては，活気ある再編成を意味しており，教育課程史においても重要な変革と意義深いものがあり，戦後教育の流れに大きな転換をもたらしたものと解される[2]。

しかしながら，「生活科」科目には，多くの課題が提出される。例えば，社会科・理科の廃止理由，教科主義ではない総合的・統合的・合科的科目としての「生活科」の「ねらい」は何か，科目の名称が「生活」という表現を採っている理由は何か，今日までの教育史の中で「生活」が学校教育において如何に関連せしめて来たかの有無，そして現場での「生活科」の授業展開での多くの方法・在り方等に対する計画性・系統的理論構成の必要性等について検討すべき諸点は多い。

すでに，多くの資料・文献が提出されており，今後も現場の実践の中からも新しい指導法・提言等も生まれてくると予想される。また，「生活科」についての色々な見方・考え方も提出することが出来るし，社会科教育の領域から，理科教育の領域から，家庭科教育の領域から，さらに道徳教育・特別活動分野から，教育史面等からのアプローチも試論・提言されるべきであり，それ等の研究等によって「生活科」の定着・確立が可能になる。

本稿は，後述の如く，「現代生活構造における消費者教育論」からと，「現代子供の人権論」からの「生活科」への試論である。そして，その分析・試論のために，一応の「生活科」の「まとめ・理解」の概観を記し，最後に，本学附属小学校における「生活科」授業の現状と実践記録を附して，今後の「生活科」の在り方への問題提起としておきたい。

二　生活科とは何か　――その概観――

「生活科」の教科目標は，新学習指導要領の中に「具体的な活動や体験を通して，自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち，自分自身や自分の生活について考えさせるとともに，その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ，自立への基礎を養う」と掲げられている。それは，単的には，次の様にまとめることが出来る。

1　生活科とは，具体的な活動・体験を通じて学ぶ「体験学習」・「体を動かす学習」である。

わが国の学校教育は，歴史的には，多くの教育試論が存在しつつも，中心的学習形態は，机上学習・知的学習であり，今日的にも「知的」学習の方法は重要である反面，「体を動かす（体得する）場」「体で学ぶ場」「游びの中での学習」という「体験学習」の重要性が，現代の生活構造・社会構造の中で必要であるという問題提起からの具体化したものであると言える。

また，「幼・小連携」の必要性もある。幼児教育は「游び中心」であり，小学校1年生の「45分坐って，教科中心の机上学習」との間には，大きなギャップがあり，両者の連結と児童のイキイキとした目を持続せしめる必要性もある。

「体を動かす学習」が，一方では，画一的教科書主義・強制的詰め込み主義教育からの心理的（心の）解放となり，他方では，健康な身体・すこやかさ・さわやかさ・豊かな心を形成し，様々な体験によって，驚いたり・感じたり・美しさへの感動がある。子供時代の「体験」は，その子供の将来の人生の上に大きな影響を与えるであろうし，体験こそ，豊かな天性を引き出す芽となり，それが人間の文化であり，「生活科文化論」「子供文化論」の形成の種子（サナギ）となる。

2　生活科とは，児童の通学する小学校の周辺の身近な生活地域（生活圏）・日常生活関係の中で，教材・内容学習・用具学習の方法を採り上げてゆく「生活に密着した学習」である。

今日の子供達には，生活実態の空洞があり，「生活ばなれした」人間，過保護教育現象や小さい子供数に対して「現代的王子・王女様教育論」現象が見られる。生活の実態を知らない，生活から游離して，単なる知識偏重教育現象の中から，人間や社会現象・自然現象への感動は生じないし，日常生活関係に対して「体を動かさないで」生活をしている中に，正常なバランスの取れた人格形成はあり得ない。「生活に密着した学習」の中で，生活の仕方，「生き方のスタイル」を形成してゆくことが大切である。と同時に，その「生活科学習」の過程で，生活上の必要な習慣・技能・知識・やりくりの仕方・かかわり方を学んでゆくことであり，いわゆる「生活ばなれした子供形成」ではなく，「小さな生活者」としての生き方の教育である。

3　生活科とは，児童が自らの意思で以って学んでゆく「自主学習」・「自己探究学習」・「児童主体者学習」である。

それは，受身学習・強制学習から，能動形学習・積極的学習の展開を意味する。その基本的構えは，児童中心の「児童が自由に育つことのできる環境」を設定する必要がある。自分を取り巻く様々な社会現象・自然現象について，自ら探究させてゆく学習の展開によって，自分の生活関係について考えてゆく「自由」な時間（後述の本章6節参照のこと）・領域・カリキュラムの設定が「生活科」である。「いい文化」を与えようと管理されたものに「いい文化」はないし，むしろ，現代社会の生活構造や自然環境への認識を閉ざしてしまう。

自らの意思で，興味・関心・考えて学習してゆくことであり，前述の「体を動かす学習・体験学習」に対して，「心を動かす学習」である。子供の「明るさ」を自由に認めてゆく「児童主体者学習」の教育環境を必要としているのが，現代教育論の中心課題であり，21世紀への子供達への「文化論」でなければならない。「心」を動かすから，「感動」がある。「意思」は意志に通じて，それは努力となるし，忍耐ともなるし，希望となり，自立化人間への前提条件でもある。

4　生活科とは，「個性化学習」である。

個性化教育とは，集団的・画一的学習から，一人一人の児童を一人の人間として尊重してゆく教育であり，民主主義原理に基づいた学習として「生活科」はある。わが国の従来からの「場」の学習（集団的・統一的教育）から，「個」の学習への転換を意味する。それゆえに，強制的・統一的結論より，

「考え方」「発想」は一人一人が異なって良いし，その考え方の違い，「こだわりの世界」・「自分学習」を認めてゆく時間でもある。また，「共通テーマ」も可能であるが，始めから「統一テーマ」で強制結論を出すことは，生活科の基本的視点とは相容れないと考えられる。選択学習（選択の自由）は，人間の文化につながる。

5　生活科とは，「自立への基礎を養う」「自立化学習」である。

生活科のねらいと基本的性格は，上記した「体験学習(体を動かす学習)」，「生活ばなれしていない，生活密着学習」，「自らの意思（心）で学ぶ自主学習・自己探究学習・児童主体者学習」，「個性化学習」を通じて，児童一人一人が自立化・自立人間への目標達成のための自己開発・自己実現をめざしての「自立化学習」である。

学校教育は，生活科に限らず，道徳教育も特別活動も，すべての教科も，最終的には自立人間の確立であることは言うまでもないが，この新設された「生活科」は，その目標に対して，ストレートに，直接的に学習内容・学習方法を展開せしめており，「自立への基礎を養う」その中核的教科であると言えよう。

その意味は，「生活科学習」を通じて，「自ら学ぶ主体的学習」の中で，物の見方，考え方，判断の仕方，表現，主張する力，抵抗権などを身につけて，「社会」「自然」の変化に対応してゆき能力・創造性の能力を培うことである。それが「自己の確立」「一人の人間としての自覚」「文化」の形成となる。21世紀社会に向って，子供をどうもってゆくか，と言う視点から，そして「生涯学習」への基礎を視点にしての「自立人間」形成の基礎と芽を育ててゆく期待が「生活科」にある。

6　生活科とは，単なる社会科・理科の合科でなくて，新しい教科として「生活科」に関する「統合・総合学習」である。

教育史の流れ・変遷の中で「総合学習」の意味と理論構成は，後述の〔4章〕に譲り，単的に述べるならば，学問の進歩は，各領域を細分化してしまった学習方法への反省からである。

すなわち，知的体系化・系統的学習と教科ごとに細分化された学習領域，教科の枠や領域の分断の上に，現実の生活実体や自然と遊離しこ所の，生活空洞化の単なる知識のみでは，子供（児童）の調和ある社会的・自然的・人間的発達を否めるという視点からの「合科的・統合的な総合的学習」の導入である。例えば，今世紀初等のアメリカのコア・カリキュラム（core-curriculum）・経験主義教育理論・相関カリキュラム（correlated curriculum）・融合カリキュラム（fused curriculum）・広域カリキュラム（broadfield curriculum）等の目的は，各教科による分断をさけ，相互的教育効果の効率を高め，「統合的」「総合的」能力を可能にして，全体的バランスの取れた人格の形成が求められるという教育理念の確立がある。

それは，戦前においては，筆者の小学校時代の「郷土科」に見られるし，ドイツにおける「労作教育」にも見られ，戦後の我が国の社会科・理科・家庭科等の「広域教科」の新設ともなった。その目的は，教科の枠や生活から空洞化した単なる知識のみでなく，児童・生徒の生活と密着した体験・技

術（工作）習得，社会的・自然的実践を重視した現代社会構造を見つめての「総合学習方法」の形成であり，例えば，戦後（昭22年）の「はいまわる社会科」「はいまわる理科」は，新しい民主主義的・児童，生徒主体の学習方法でもあった。

戦後（昭和22年の学習指導要領）の民主主義教育政策は，しばらくの時期を経て，徐々に変化してゆくのに気付く。

単的に，シビアな視点で見るならば，講和条約の成立以後，日本の自主独立の国家論としての意識は，第一に，国家の教育権（国民の・子供の教育権，学習権ではなく）の再構築と教育行政の中央集権化・管理体制の強化（例・勤評・学力一斉テスト・文部教研・検定強化・期待される人間像等）の中で，一定の理由は認められるけれども，変化してゆく。

第二に，「能力主義」教育（差別の論理）の展開によって，日本経済の再建と自由化・国際競争に勝つための技術革新（模倣技術から自主技術への転換）のための人材の育成の急務としての確保・「人間の不平等」・「分をわきまえ」を確信させての進路指導による入試改善・人間の選別・差別等による社会構造・社会規制の中での労働力の再配置（例・ハイタレントの優秀人材・中級人材・下級人材・底辺労働者の養成等）等の社会的・外部的要因が，学校制度の中に反射効となり，戦後の多様性，個性的，平等主義の民主教育の否定現象であると解される[3]。

それゆえに，教科は，それに基づくための再編成であり，戦後の，前述した「はいまわる社会科」「はいまわる理科」（およびその他の教科→例・算数教育においても，利率の計算等の如く，生活計算の単元の消滅）の中での，新しい子供の発展を求めた教育理念は，雑学に過ぎないと言う批判・基礎学力の低下・系統的学問体系が否定されていると言う角度等から，昭和33年の指導要領の改訂により消滅したと言えよう。

そして，日本人全体が，立身出世型意識と幻想でもある「わが子の能力」と中流・上流階級を求めての欲求意識は，高度成長下社会（貧乏からの解放という物的欲望と共に）の中で合致した現象である。

本来，学校とは「楽しい所」であることが第一の条件であり，それゆえに，イキイキとした児童が，そこに存在することである。と同時に，「家庭」も同じ様に「楽しい場」であり，「勉強」を基準とした「能力」や「いい子」として親（教師）の前でポーズを取らなければならない構図は，人間不在の子供の「心」の痛ましさが見える。とするならば，子供は，面白いことを求めて，それが子供の非行（例・万引は面白いと言う），暴力，いじめ，登校拒否，自閉症，子供の自殺，道徳的退廃（例・中高生の性）等の現象を生み出していると同時に，「子供文化（「万引」より面白い・楽しい中味のある充実した「学校・家庭・地域」をつくり出すことである。それを心の文化と言う）」の形成が不可能となっているのが現実である[4]。

今一度，「子供の現代的人権」「子供の民主主義的学習権」「一人一人の子供の個性，人間として尊重される文化と生きる権利」「学校生活の楽しさ」を再確認・再形成しなければならない。その意味での新しい教育理念と21世紀に向っての教育を目指して新設されたのが「生活科」であり，その学習方法が「統合的・総合的学習」方式である。

その新しい教育理念を前提にして，現代社会現象・生活現象・人間現象を「子供の鋭い目・子供の鋭い文化」からの学びの姿勢である。現代社会や未来への「感度」がいいのは，むしろ子供のほうであり，教師や親が，そんな「自由な目」を管理して安心しているけれども，暗くて不自然な安定である。子供の明るさを自由に認めてゆく社会や教育環境を必要としているのが現代教育論の中心課題である。前述の「合科的・統合的・総合学習」を前提としてつつ，現代の「社会意識（現象）や自然意識（現象）」の芽を育ててゆく内容学習・用具（教材・手段）学習を設定し，自らの具体的活動・体験を通して学んでゆく仕方・判断をしてゆく力・能力を養う必要がある。そのための具体的な方法として「合科・統合・総合」方式が正しい選択として提出されるし，単なる遊び中心でもなければ，各家庭が「しつけ不足」であるからと言う一面的・部分的・形式的現象から，その代役として学校が背負い込むための教科でもない。第3学年の各教科へつながってゆく（後述）基礎的・総合的・計画的・系統的・具体的展開可能な・児童の主体的学習の確立可能なる中核的な「新教科」の設定が「生活科」である。

三　生活科の具体的内容

前述で述べた「生活科」新設の基本的目的・性格を前提として，具体的には「3つ」の内容学習に大別される。すなわち，「現実の生活実体・実践生活」を，そのまま直接的な課題（教科）にして行なわれるのは，低学年として，未分化であり，不充分化の恐れや問題があるゆえに，低学年の生活実体（児童とかかわりのある）を考えて，その生活の「基礎」となる領域に関する内容学習である。

第一は，自分（児童）と社会現象との関係である。①　自分と人々との関係（家族・友人・先生・身近な人々等の共同体・人間関係）への意識であり，②　自分と物との関係（生活と消費・生活用品・公共物・物の製作や作業・情報の伝達・健康で安全な生活等）への認識である。

児童とかかわりのある身近な生活地域（生活圏）・日常生活関係への認識（認識とは，興味・関心・楽しさ・実感等の心の動き）を意味し，身近な社会生活関係に，無関心・無感動・無気力の姿勢から，関心・感動・気力の芽を育てる学習内容領域である。

第二は，自分（児童）と自然現象との関係である。「自然」に学ぶことの大切さ，自然を通じて人間としての生き方を学ぶ必要性がある。単に自然の事物・現象の特徴・知識や法則だけでは人格の一面的作用にすぎない。

身近な自然（水と空気と土地からなる自然環境）との触れ合いの中で，季節感（寒暖・晴雨・日長の変化等は，今日の季節感喪失時代としての無関心からの脱出）・動植物の観察・栽培・飼育・成長の変化・製作等への諸認識は，生きるための様々な条件（水・光・空気・温度など）に気付くし，「生命観（生命の軽視・死のゲーム化したテレビ・マンガ等の現代の情報知識への反省と認識）」は，生活イコール life イコール生命でもあり，生命への大切さは心の育成となる。

第三は，自分自身（自己）の認識である。その意味は，前述の社会認識・自然認識と同じ様に，自己を対象として見つめてゆく「自己概念」「自己像」「自己の成長」の形成であり，同時に，身近な社会・自然とのかかわりの中での「自己の再認識」・「自己探究」・「自己の役割」を認識してゆく重要性

がある。

自己認識は，他者（相手・社会・自然）認識の形成であり，他者の現象・変化・痛み・立場・関係論の理解・感受性が育ってゆくことの大切さへの心の動きである。環境や生活への変化に敏感な心，「豊かな感性」を育てることの大切が今日の教育の課題でもある。そのためには，自分自身を認識して，自らの意思によって学び，その中から，基本的には，「人間としての生き方」「生きてゆくスタイル」「生き方の文化」の形成への芽を培い，「自立化人間（ひとり立ち人生論）」形成の基礎を養うことを，この「生活科」学習の中核的な最終目標にする所に，生活科新設の必要性と特色がある（前章・5参照のこと）。

以上の如く，「生活科の具体的内容」の「3つ」の基本的視点を前提にして，第1学年・第2学年のカリキュラムの内容として設定・構成される。後述の本学附属小学校の単元内容（年間指導計画）も，その一例であり，様々な特色のある構成（例・消費者教育・生活環境教育・家庭生活教育・国際理解教育・エネルギー教育・コミュニケイション教育等に力点をおいたカリキュラムの設定も可能である）が想定されるし，全国が画一的・統一的カリキュラム（一律に，ザリガニで遊ぼうとか，メダカを飼ってみようとか）で規定される必要はないし，具体的教材（用具学習）とその展開は千差万別であるべきである。各小学校の所在地の社会環境・生活環境・自然環境は様々であり，全国一律の統一的な教材（内容）学習は成立しない。そこに，現場の「生活科単元」の指導計画・カリキュラムの困難性・指導の難かしさがある。ただ，最少限的に言えることは，「教師の条件」として第一には，生活科に対して明確な目標と意識（第3学年の各教科への連結の基礎）の確立。第二には，全国統一的な指導計画・カリキュラムからの脱却。第三に，教師主導型から児童主体型学習への転換。第四に，教科の評価について，「知識・理解・技能」と言う達成目標より，「能力・関心・態度」と言う体験目標に力点を意識することであり，同時に短期（見える）の教育効果より，長期（見えない）の教育効果（長い年月のあとで，その児童の生き方の仕方・支えとなるかも知れない）への配慮・大らかさによる指導・評価が必要である。それが，「生活科」の定着のための，確立のための「教師の条件」として提出される。

四　「生活」教育の思想の流れと変遷

小学校低学年に新設された「生活科」教育論には，その教科の名称としての「生活」の表現について，永い教育史の中における背景がある。

第一には，ルソー（Jean Jacques Rousseau・1712～1778）の「エミール・Émile）の中で，当時の貴族主義特別階級の生活が，その子供達の「生活ばなれ」した日常生活の実態の中で「生育機能が歪められている」ことを指摘して，働く人々の本当の生活の中に，人間らしい生活があり，それが真の教育機能を果し得るとして，労働（職業）のもつ人間形成作用の重要性を述べている[5]。

第二には，今日の子供達に対する過保護教育現象や一人や二人の少ない子供（兄弟）数に対して，特に，現代的「王子・王女様教育論」現象が見られるし，体を動かすことの必要性のない「キイとスイッチとボタンの生活構造」は，子供の心に「生活ばなれ」した・生活実態から浮き上った知識偏重

教育現象が見られる。生活を知らない教育から，人間や社会現象・自然現象への感動も生じないし，自らが体を動かして，関心を有し，興味を以って考えてゆく教育機能が働かないし，自立化人間への形成の道は遠い。

第三には，「働く」と言う意味と生活教育思想の永い歴史的背景が，そこにある。「Work」とは，主体性があって意思を以って働く意味であり，「Labour」とは，命令されて働くことであり，単なる動物的動きに過ぎない。現代社会において，受身的動き・Labour 的であってはならないし，「生活科」の基本的姿勢が「自らの意思で・主体性学習を求めて，自立化人間への形成の芽」を育て・培うと意味は，そこにある。

パウロ（Paulos・？～62／65）は，天幕を作る職人であったし，スピノザ（Baruch de Spinoza・1632～1677）は，レンズ磨きの職人であったし，ユダヤの諺に「その子供に手わざを教しえないことは，盗みを教しえたことになる」と言うことの「働く」伝統が，後にキリスト教にも入って来て「働く神と共に我々も働く」思想は，中世の修道院（規則）にも，そのローマ時代の「働く」という流れとユダヤ・キリストの流れとの合致したものとしての原型が見えるし，修道院の中から，メンデルの法則・治金学・農学・工学等の学問の発達も見られる。

第四に，その教育思想の変遷としては，各国で様々であるが，ギリシャ的伝統の学校制度の中でも，キリスト教 proper の学校においては，その要素は多く含まれて残されている。ヨーロッパの各国においては，一方では，放棄（消滅しつつも）されたが，学校と並んで必要とされた産業的教育形態としてのギルド（Gilde）・徒弟制度（弟子入→職人→親方と言う人間同志の信頼関係・従順な態度など）は，19 c 以来，本来的学校によって潰されるまで存続しつつ，そのギルドの精神は，学校制度の中に組み込まれた。それが現代でも Human relation ・ family relation・共同体思想等の中に，重要視されていることは言を挨たない。

第五に，ペスタロッチ（Johann Heinrich Pesta lozzi・1746～1827）の教育思想も，前述の徒弟制度が崩れた時代ではあるが，学校の中に「一定の労働」を通じて（現実の生活に代わる場を学校に求めて）教育の中にバランスのとれた人格・人間形成があるとしている。ペスタロッチが「生活が（人間を）陶治する・Das Leben bildet)」と言う言葉は，「労働が人間・人格を形成する」と言う意味であり，この労作教育は，20世紀における労作教育思想・生活教育運動の基礎となった[6]。すなわち，「積極的に体を動かす・具体的体験をすること・自らの意思で主体的学習」の場を学校制度の中に組み込むことであり，今日の現代社会生活構造の様々な現象に対して，自らのかかわりの中で，学ぶ「生活科」こそ，「現代」教育論として「現代人」の形成のために，新しく再提出されたと言えよう。新しい生存権的人権の一つ（確立）である（後述）。

第六に，近世に入っても，前述の「生活教育」理論は，各国によって，それぞれの社会状勢に対して，例えば，ドイツ流・イギリス流・アメリカ流の如く，異なる学校教育の変化を示すが，一般論としては，古典的な Liberal arts（教養）は通じなくなり，現実の社会と直結した（例・産業と直結）実学主義的精神の展開をしている。

イギリス（1872年）における grammar school ・ public school（産業を中心とした教育）の二つ

の型。1958年のフランスの教育形態。1958年のドイツの教養教育形態より産業教育形態が低いと見られていた考え方を，むしろ後者の方が高いとする教育改革。アメリカの新しい理想社会・独立国家を作ろうと言う New England（清教徒・1635年のボストン中等教育・grammar school，1638年のハーバード大学の宗教的指導者を作ろうとする教育思想）と対応して，他方では理想に燃えてと言うより，金儲け（取引・金銭生活）のための1607年のバージニア教育思想・その前の1617年の奴隷狩り（労働者不足）等を経て，1821年・具体的産業に直接する academy high school は，底流を残しつつも，1990年に現実社会に適応する high school としての一本化となった。その背景には，フランクリン（Benjamin Franklin・1706～1790・Time is money）も，現実社会に対応した新しい学校としての accdemy school を創っており，1930年代にヨーロッパ的に少々の立返り現象までは，現実の生活に対応するプラグマティズムの精神（職業教育・日常生活技術教育として）は（今日も基本形態として有しつつ）貫徹している。

そこには，デューイ（John Dewey・1859～1952）（民主主義と教育・社会生活と教育・教育と社会・環境と教育・学校教育と生活の結合）等の主張する経験（体験）の連続的発見が教育であるとしてのオキュペーションを学習の主要な場（学校と教育）として位置づけて，「生活と学習」の統一の場としての実験学校を想定したことも，やはり中世時代の「生活・労働・仕事・職業」を学習と密接に結びつけての「生活教育論」の流れに立っており，今日的にも一つの教育理念として肯定される(7)。

ソ連においても，1917年（10月革命）～1929年にかけて，帝政時代の教育水準の非普遍性と低さ（文盲率の高さ）から民衆・農民の教育の必要性を協調しつつも，教育には破壊と困乱の時代があるが，その中には「労働を尊ぶ」「幼小教育・環境万能」「職業教育の発達をはかる」「合科的学習」などの学習形態。そして1928年～1832年（以降）にかけて，組織的・統計的・注入式教育改革を行ない，共産主義教育が中心となるが，一方では1934年には総合技術教育を前期・後期の中等学校の中に組み込んでいるし，シャッキ（Stamlislas Shatsky・1878～1934）は，社会に有用な作業を重視する実験学校をモスクワ郊外に設置し，生活と結びついた（社会の生活要求を考慮する場としての）学習を展開して，その村の生活を形成する指導力となっており，学校と社会現象（自然・労働・生活・社会・環境・経済など）とを結びつけた教育思想と教育実験がある(8)。

第七に，わが国においても，江戸時代後期の寺子屋を中心として日常生活・生産活動に必要な知識・技術を教しえた庶民教育や福沢論吉等の洋学派の実学主義教育思想は，維新政府の「学制」（明治4年・文部省の新設）の上に，多くの影響を残しつつも，明治30年代以後，欧米の新教育運動の影響・大正デモクラシー思想等は，わが国の教育制度史の上に，様々な教育論を展開した。

パーカー（Parker, F.W.・1837～1902）の子供の活動と独創性を協調し知識の統合を提唱。パーカスト（Parkhurst, Helen・1887～1959）のダルトン・プラン（Dalton plan）の統一的・受動的学習から個性的・自力学習。モンテッソリ（Montessori, Maria・1870～1952）の自由活動を重視する教育。ドクロリ（Decroly, Ovide・1871～1932）の統合学習プログラム。前述のデューイの経験主義教育・生活教育。ケルシュンシュタイナー（Georg Kerschensteiner・1854～1932）の労作教育等の新教育運動の影響を受けて，大正時代の及川平治氏の動的教育論（生活経験に基づく学習指導・learning by

doing ・ Doing is education)，東京女高師附属小学校・玉川学園（小原国芳の善人教育論）等の作業主義教育の実践・八大教育主張の中にも自由主義・児童中心主義・活動主義の提言であった。

と同時に，一方では経験主義教育理論や，ツイラー（Tuiskon Ziller・1817～1882）の「中心統合法」理論は，「合科」カリキュラム・統合・総合学習となり，教科の枠や知識の体系にとらわれない学習領域の構成・広域教科の誕生となり（前述の二章・6参照のこと），わが国においても，木下竹次氏の奈良女高師附属小学校における子供達による「生活」探究の構想の上に，教科ごとの時間割を廃止した「合科学習法」の試み，野口援太郎氏・野村芳兵衛氏等による池袋の「生活学校」や現実の生活を見つめさせての各地の「生活綴方（例・秋田の北方教育誌の発刊など）」実践に見られる。第二次大戦後の無着成恭氏の「山びこ学校」や宮原誠一氏等による「生産主義教育（労作教育）」等の「生活」教育の思想と実践の歴史的変遷の流れには，その基本的視点としては，「生活ばなれ」しての教育は在り得ないと言うことであり，「生活」こそ「生きた人間の教育論」の核心であるという流れは絶えず存在していたと言えよう[9]。

五　現代生活構造と子供の世界

「生活科」教育の必要性は，現代社会構造の中に要因がある。人間と社会との関係は，人間が社会を作り，その社会によって人間が作られる。同じ様に，人間が文化を作り，その文化によって人間が作られる。その社会現象・文化現象を子供の世界から見ると，現代生活の中で作られた「社会」「文化」の様々な現象が，「受身」である子供の世界へ反射効として影響し，子供は生育してゆく。若し，子供の心身に様々な特徴が見られるならば，それは，大人（人間）が作った様々な社会現象・文化現象の表徴であり，深刻な状況であるならば，その社会・文化の実体が深刻・異常であり，それを形成した大人達が直視する必要があるし，子供達には「教育」と言う手法で責任を負う必要がある。現代生活構造の分析と大人の反省こそ，子供の世界に対する「教育」の源泉である。

1　キィとスイッチとボタンの生活様式

今日の生活関係様式は，「キィとスイッチとボタン」の生活であり，その社会構造の背景には，昭和30年代からの高度成長・技術革新・新製品の大量生産・大量消費をも含めて，従来からの「体を動かす」日常生活関係を，全く「無運動」で生活を可能にした。体を動かさなくても，体力を使わなくても生活が出来る生活様式は，一方では人間の肉体を蝕んでいることであり，アメリカの児童の多くが，登下校の車による送迎・栄養の取り過ぎによるコレステロールの過多等から心臓病の一歩手前の状況にある現象を他山の石としない教育配慮が必要である。動物でも歩けなければエサは取れないし，歯が無くなれば食べることは不可能となり，死の運命にある。「歩かない」・「体を動かさない」とき，いわゆる成人病が「8歳で胃潰瘍・10歳で動脈硬化・17歳で心筋梗塞」と言う幼衰現象（老衰現象に対比して）という無運動病が生れてくる[10]。

わが国の明治以来の近代化・現代化文明は，「体を動かさない」便利社会と飽食社会を作り出し，一方では，体力の「劣化現象」と，他方では，心の「人格崩壊」を作り出した現代生活の仕方の中で機

械文明の「子供の世界」を形成したと言える。

生活科教育の中に，教室内（机上）教育論から戸外教育論・健康（体力）教育論・ハダシ教育論・無運動病追放等への新しい視点（21世紀に向って）が必要である。

2　受身の生活様式

生活の便利性は，子供を「受身」の生活様式へ転換せしめるし，前述の如く，体力を喪失せしめる。便利な生活空間は，型に入ってしまって，「子供の世界」を小型化・小づぶ化してゆく現象が提出されている。

受身の生活様式は，自らの「意思（心）」を動かすことなく，便利性という生活機能で終始するゆえに，生活の原因・過程・結果への流れが中断・喪失してしまい，さらに，カード化社会構造には過程・実態を無視した所の，単なる「便利性」が拍車をかけて，何不自由ない生活構造に疑いを持たない「思想停止」生活意識を形成して，周囲の人々（親・先生・友人・近所の人々等）や物（便利な消費財等）が，子供の精神（心）に歪みをもたらしているのが，今日の生活環境となっている。

さらに，その「受身」意識は，他人の所為（責任）にして，「～してくれない」と言う不平・不満の「くれない族」・「依子型人間」を作り出して「自己責任」「自立化人間」の確立を失ってゆく所に大きな問題点と課題がある。

3　生活の意味と生き方

生活とは，文化であり，教育は，自らの生き方のスタイルを作るためにあるのであって，「受身」の生活構造からは，創造性や探求性，すなわち，創意や工夫をこらす意思・気迫を失った所には「個性」・「生きるスタイル」は育たない。無関心・無気力・無感動の生活様式と構造は，そうであればあるほど，「心」「暖かさ」「人間性」を失ってゆく。　今日の生活環境・自然環境の中で，自らが，その取り巻いている色々な諸現象とかかわって，考え，意味を見つけ，体験して，判断し，自らの責任において結果を負い，行動してゆく，「自立人間」を目指して，自己の生活・生き方のスタイルを形成し，「生きる」意味づけを養うことが必要であり，現代社会に生きる「小さな（子供）現代人」としての必須条件でもある。

現実の「生活」を無視して，「生活ばなれ」の日常生活は空洞であり，教師を持たない動物的生き方であり，そこには人間の生き方は存在しない。「生活」こそ，最良の教師であり，「生活」の意味を探求する所に「自立化教育」の形成がある。

4　感性の豊かな生き方

体を動かさない機械文明やカード社会文化の生活構造は，結局，感受性の喪失現象となってあらわれてくる。

世の中で，人々や世間の共同生活関係，すなわち，その交錯・出会い・やりくりをして，かかわり合いながら生きてゆく場合に，人間には，「温かい人と冷たい人」とに分類することが出来る。後者の

「冷たい人間」の形成は，今日の生活構造からくる「便利性」と「機械文明」からの「受身論」にその原因を求めることが出来る。感受性のうすい，感じること，感激したりすることが少ない生き方論が成立し，かつ，「自分中心」に，自分のためになることしか感じない「レシーバー（受信機）」になっていることに気付く。そこには，感性の幅が非常に狭く，うすく，「自己」への関心・感受性はあるが，他人のため・社会のためへの関心・興味は少なく，今日の「社会構造・生活構造」は，「冷たい人間」の集団育成の場となっている。

例えば，自然の中で「具体的な体験学習」「遊びの学習」を通して，四季折々の美しい自然・緑を見つけ，山の中の空気を吸い，虫や鳥や爬虫類の共存を知り，動植物の生命の大切さを知り，その中から問題を見つけ，思考（試行）し，納得（理解）し，実践（解決行動）する過程で，充実感や感動を味わい，児童の「ひとみ」には輝きがあり，心豊かな・イキイキとした「目」となり，これが Humanism となり，「温かい人間」の形成となる。

人間への共感・共存やヒューマンな，感性豊かな自然との共存・社会の現実の生活への想いが，人間の生き方の基本である。単なる「知性対感性」と言う小さな視野を超えて，「感性教育論」も生活科教育の一つの目的として求められることが出来る。

5　隙間風教育論と生活科教育論

現代生活構造は，わが国が成熟社会化して，機能的・便利的生活様式を形成して，「生活空間」が，「きちん」とした型にはまっており，殊に，都市生活・団地生活（その生活形態は，現代情報化社会の中で同一文化形式を求めて，田舎も同じく類型化されてはいるが）におけるコンパクトな「ムダの無い生活空間」と言う安易な都市文明で，現代住居論を支配していると解される。さらに，家族構成が，戦後の社会構造・経済構造の変革・生活様式の変化・家族意識の変化等から，大家族・三世代同居家族論から小家族・核家族論へ移行した家族構成の変遷が，その要因として背景にある。

近代化した生活空間・現代住居構造（機能的リビング・コンパクトで水量・温度まで自動化した浴室・合理化された台所・近辺の整備された住宅街・道路・小公園・きちんとした街路樹・窓側のプランターに並べられた草花・全ての窓はアルミサッシで仕切られて，外部からの騒音・雑音は勿論，あらゆる世間の波風も自然の風も遮断した「すき間風」のない密閉した各部屋）の中には，きちんとする習慣やきちんとした顔とか，きちんとした服装とか，その生活空間は「小型人間論」「小つぶ化」した「子供の心」として形成され，空想一杯の大型人間論・野生味一杯のたくましい人間論・暖かい心豊かな人間味のある人格形成が育たない様に考えられる。歴史的に見ても（歴史上の人物），都会の中で育った人々より，田舎から出て来た人に「大物・偉人」が輩出している所以は，ムダの無い都会の住居・生活空間と異なった所の，田舎の風景や自然，のびのびとした心情・すき間だらけの不便な，体を動かす日常生活や自然の風も世間の波風も一杯吹き込んでくる中での独創性・限りない空想的思考を与えてくれた場があったと言える。

子供の数は，一人～二人と言う現代小家族構成の中で，親子論（母親論・民主家族論）は，母親（または，それ以上に父親）が，サッシ化し密閉されたコンパクトな生活空間の中で，常に目がとどいて，

「きちん」としなさい・「早く○○しなさい」と言う「しつけ論」「親子論」が，「子供の世界」まで，コンパクト・小つぶ化している現象から，独創性のある人間が生まれるだろうか。

個性のある生き方論・独創性のある生活のスタイル・空想的人生論・「すき間を持っている人間」を，私は好きである。それ以上の強制的・統一的教育論は必要でない。生活科教育は，個性化教育でもあり，「こだわりの世界」を一人一人が持ちながら，「自分なりの生活のスタイル」を身につけて，それで世間や他人とは「やりくり」をつけて行けば良いのであって，人は様々・生き方は様々であるべきであり，それを「人生」と言うべきであろう。

本稿執筆の頭初の目的としては，さらに，多くの「消費者問題（現代生活問題）」を惹起せしめている消費者教育領域における消費者主権からの試論と，現代生存権的人権からの試論をも提出したいと言う予定であったが，頁数制約の関係もあり，前述の「生活科」の概観と現代生活構造論で終始した。上記の「二つ」の論点に関しては，他日の機会に改めて論及して見たいと考えている。

六　附属小学校における「生活科授業」の現状と実践記録

現在，本学附属小学校では，新学習指導要領に基づく移行措置の中で，すでに「生活科」授業の展開が行なわれている。そこには多くの問題点や課題が出て来るであろうし，第3学年への一定の計画的・系統的連結の効果（評価）も期待され得る。

新指導要領に基づく理論上の基本的性格や目標は簡単であるし，大学側の「教育学部」の受講学生を対象にしての「生活科」に関する机上論も容易である。しかし，恐らく現場での授業形態の中では，児童一人一人が異なる発想を持ち，それぞれの経験学習を得ながら，様々な認識を求めてゆく「生活科」授業の展開は，多くの困難性・用具の限界性・地域の特殊性等をも含めて，教師側からの課題は多いと予想される。今後も，現場の授業・実践記録から，多くの材料を得ることを期待しつつ，お互いに研究しつつ，そして「単なる遊び」で放っておけば良いと言う姿勢や近い将来には，教科の再編成史に見られた如く改訂されて消滅してゆくかも知れないと言う消極的思考から，現代社会（生活）構造における「生活科」教育の重要性や現代的人権の一つとして，真正面から受けとめて，積極的に「生活科」の充実化を図ってゆくべきであると考えている。

そして，下記の如く，本学附属小学校での現場での「生活科教育」への「取り組み方」「実践記録」を提出して頂き，その実践試行の中で，さらに充実化・定着化してゆくことを期待しながら，同時に，その経過と記録を，共に続編として，本紀要に提出させていきたいと願っている。

なお，附属小学校の「生活科」教育の全体の「まとめ」は，杉原祥介教諭が行ない，第1学年の生活科は牧野淳子教諭（第1学年担任）・第2学年の生活科は堤孝彦教諭（第2学年担任）からの資料である。

1　子どもが生き生きと活動し自己実現の喜びを味あわせる生活科指導

岐阜教育大学附属小学校

(1)　はじめに

私たち教師は，聖徳太子の「和の精神」を理想とし，教師と児童，児童と児童の心のふれあいを大切にしながら「心豊かに，よりよく生きる資質・能力を高める教育」をめざしている。

そのために本年度は研究の焦点を生活科指導にあて，「子どもが生き生きと活動し，自己実現の喜びを味あわせる生活科指導」を求め，子どもの実態に即した実証的な研究を進めることにした。

(2)　研究の立場

生活科の究極の目的は「自立への基礎」を培うことである。

つまり，具体的な活動や体験を通して自分自身とのかかわりから，よりよく生きようとする小さな生活者を育てることである。

したがって生活科の指導では，子ども一人ひとりが自分なりの願いを持ち，活動を広め深めていく中で，思ったこと感じたことを自分なりに表現し，それを仲間とともに共有化していくといった一連の過程が重視されなければならない。

(3)　研究の視点

「子どもが生き生きと活動する」という観点から，どのような能力の子どもを，どのような教材と内容で，どう育てるかを明らかにしていかなければならない。

また「自己実現の喜びを味あわせる」という観点から，子ども一人ひとりの個性や能力，生活体験に応じる指導法の工夫，つまり個人差に応じた援助と助言が必要である。

(4)　指導計画の作成

生活科の学習は画一的達成型の学習ではなく，個性的表現型の活動中心の学習になる。

したがって，生活科の単元は子どもの身近かな生活圏から素材を選び，生活科の内容を具体的な活動や体験を主体にした学習のまとまりとして構成することが大切である。

①　子どもの興味・関心を柱にして素材を教材化する。

②　子どもの多様な取り組みを保障する活動内容と資料を検討する。

③　子どもの内面から誘発される活動や体験を重視する。

④　できるだけ社会と自然を一体化させた単元構成をする。

⑤　基本的な生活習慣・技能は活動の過程で身につけるようにする。

(5)　生活科の実践

生活科の授業では，子どもたちがチャレンジしたくなるような課題を，体験を通して解決させることが大切である。

子どもたちは，つまずきながらアイデアを出し合い，じっくりと時間をかけて追求していく。ここでの活動の主導権は子どもたちの手にゆだねられ，教師は子どもたちにとってよりよき助言者にならねばならない。

生活科の授業を通して，生き生きとした子どもたちを育てたいものである。

① 材料と道具

子どもの多様な活動を可能にし，自由に選択できる材料・道具を準備する。

② 環境

子どもたちが，自由にのびのびと活動できる時間と場所を確保する。

③ 情報

子どもたちがチャレンジしていくために必要な知識や資料を提供する。

④ 援助

子どもたちが安心して決定できるよう助言と援助のあり方を検討する。

2　第1学年　生活科学習指導案

指導者　牧野　淳子

(1) 単元　　楽しいお正月

(2) 単元設定の理由

お正月には家族そろって初もうでに出かけたり，おせち料理や雑煮を食べたり，お年玉や年賀状をもらったりするなど，子どもたちにとってお正月ならではの喜びも多い。

しかし，暖房のゆきとどいた室内に閉じこもり，テレビにしがみついて生活している子どもたちにとっては，お正月の行事や地域の人々の触れ合い，伝承遊び等への関心はうすくなっている。

したがって，本単元を設定し，こうした子どもたちを年始年末の諸行事に積極的に参加させたり，地域に伝わる伝承遊びを調べさせながら，ふだんは見過ごしがちなお正月の行事に目を向けさせたい。

また，室内に閉じこもり，テレビにしがみついている自分の生活を振り返らせ，自分たちで遊び道具を作ったり遊びを工夫するなど，友達や地域の人々との触れ合いを広げるとともに，積極的な生活姿勢を培いたい。

(3) 単元目標

① お父さんやお母さんが働いている様子を絵にかいたりお手伝いの模擬活動をしながら，家族の一員としての自覚を持たせる。

② 一年間のくらしのカレンダーを作ったり，冬休みの生活について話し合いながら健康で安全なくらしがおくれるようにする。

③ すごろく作りをしたり，いろいろなお正月遊びをしながら，冬の行事や自然の特徴に気づかせる。

(4) 指導計画　　（全12時間）

第1次　私の家族 …… 2

第2次　もうすぐ冬休み…… 4

第3次　お正月の遊び…… 6（本時 3／6 ）

(5) 本時の指導

1）　ねらい

自分たちの手で遊び道具を作ろうとする意欲を育てる。

2）　展　開

教師の働きかけと援助	予想される児童の活動
1．自分たちの手ですごろくを作ろう。	
・どんなすごろくがいいですか。 ＊前時に遊んだすごろくを壁面に掲示	（友達の話を聞く） ・いろいろなすごろくができる。
2．すごろく作りの準備をしよう。	（友達と相談する）
・一人で作るのか，グループで作るのか決めましょう。	・だれとグループをつくろうか。
・紙と道具を準備しよう。 ＊大きさの違う3種類の紙	・どの紙を使うといいか。
・どんな場所で作りますか。	・どんな道具を使うといいか。 ＊絵の具　サインペン クレパス ・どこですごろくを作るといいか。
3．すごろくを作りましょう。 ＊個別指導と援助	（すごろく作り） ・すごろく作りをする。
考えがまとまらず迷っている子には、いろいろな生活体験やすごろく遊びの話を聞いて方向づけをする。	
4．すごろく作りで工夫したことを発表してください。	（友達の話を聞く） ・いろいろと工夫してあるね。
・工夫したところはどこですか。	・こんなところをなおしたい。
5．次の時間もすごろく作りをします。	

3）　授業の観点

生活科の本質からみて，本時の指導展開は適切であったのか。

(6)　授業を終えて――感想と考察――

1）　「生活科の授業とはどうしたらよいのか」という課題を胸に秘めての研究会を重ねてきて，今だ暗中模索である。

「生活科は，今までの社会科・理科とは違うのである。」とは，よく聞く言葉ではあるが，それでは，実際には，どんな授業を展開すればよいのであろうか……。

そんな中での第一歩であった。

学習指導要領では，生活科の教科目標を次のように示している。

> 具体的な活動や体験を通して，自分と身近な社会や自然の生活について考えさせるとともに，その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ，自立への基礎を養う。

この目標には，生活科で求める4つの視点が示されている。

①　具体的な活動や体験を通すこと

②　自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもつこと

③　自分自身や自分の生活について考えること

④　生活上必要な習慣や技能を身に付けること

そして，この視点をおさえることによって，「自立への基礎を養う」ことを究極的な目標としている。

2）　さて，この双六づくりの授業展開として悩んだことは，図工科ではないことである。従来なら当然図工の学習として扱われてきた内容である。

生活科は，確かに，社会・理科・図工・家庭科との接点を持ってはいるが，それらの教科とも違うし，合科でもないと考える。

双六づくりの要素として，特に，図工との類似点が考えられるわけであるが，ここで，指導要領で図画工作の目標を確かめてみると，

表現及び鑑賞の活動を通して，造形的な創造活動の基礎を培うとともに，表現の喜びを味わわせ，豊かな情操を養う。

とある。

そこで，双六づくりの目標は，作品を仕上げることにはかかわらず，「作品を作ろうとする意欲を育てるもの」として，「自分たちの手で遊び道具を作ろうとする意欲を育てる。」としたのである。

意欲的に活動に取り組めるように児童の活動を誘発させる材料のセッティングということが，重要な意味を持つことになると考えた。そして，活動を自発的に自由に取り組ませるため，従来ですと，教師の指示，枠ぐみをしすぎたことを反省し，「選択する能力」を重視し，次のようにして活動の出発点を求めた。

①　グループ構成

第一に，活動するのは，1人でもよいし，2人，3人でもよいとし，3人以上にはならない規制は出したものの，自由にグループ作りを促した。結果は，1人で活動した者が4人，2人で活動した者が2組（4人），3人で活動した者が6組（18人）という，圧倒的に3人グループが多くなったのである。自己主張の強い1年生にとって，グループでうまくまとめられるかという心配が強かったものの，やはり多少の意見の食い違いはあってもそれをどう解決していくかも重要であることも確認できた。さらに，遊んでしまう子もなく一人一人が，活動に参加できたことは大変よかった。

また，後で，一人で活動していたS子にきいたところ，初めから一人で作ることに決めていたというのである。一人の方が自分の作りたい物が作れるからという。これもS子なりの選択だから，これでよかっただろうし，実際，周りの友達の事など全く気にせず，自分の作りたい双六に夢中であった。

②　紙型の選択

第二に，紙を普通のB紙10枚，B紙の半分の大きさ10枚，四つ切画用紙20枚と三種類を用意し，自由に選択させた。

3人グループでB紙に取り組んだり，一人で大きなB紙に取り組んだりとバラエティーに富んだ結果となった。

その中で，A子は，一人で大きなB紙を選んだ。無理なのではと思うのを尻目に喜んで大きな紙を

持って行き，生き生きと取り組んでいる姿をみて，やっぱり画一的な仲間で，画一的な紙の与え方でなくてよかった思った。

③　場所の選択

第三に，活動場所についてであるが，教室より隣接している図書室の方がよいという児童からの意見が出て，それをすばらしいアイデアとして認めた。今までならば，固定された場所にしばられていた。しかし，児童の考えで，活動しやすい場所の選択の意見が出たことがうれしかった。

図書室には，大きな机があり，３人で活動しやすいと考えたのであろう。また，教室で机を寄せ，床の上で紙を広げてかいていた３人組，高さの違う机を合わせていた３人組（但，高さが違うことに違和感を持っていない）など，さまざまな姿勢で取り組んだ。

大人の目から見れば，おかしなこともあるが，それには，まだ気づいていない。しかし，それも体験をして，やりにくいことがわかる材料となるのではないかと考え，特に，教師の助言は与えなかった。

また，始めてのカラーペン使用ということも手伝ってであろうが，前に述べてきたような児童の意欲を求めた展開で進めたところ，10種類の双六を考え出す結果となった。

１人で考えた双六・・・お店やさん
おばけ
おやつ
公園

２人で考えた双六・・・宝さがし
白雪姫

３人で考えた双六・・・冒険
迷路
動物
動物園
桃太郎
スーパーマリオ

３）　家での活動へ発展（児童の作文ノートから）

たのしかったすごろくづくり　　１年　しのだ　さやか

11月に，すごろくづくりをしました。月よう日と火よう日は，先生たちのつくってくださったすごろくであそびました。水よう日に，じぶんのすごろくをつくりました。わたしは，「おやつすごろく」にしました。

おやつの「お」のてんは，いちごで，「や」のみじかいてんもいちごで，「す」のまるは，ドーナツで，「ご」のてんてんは，いちごにしました。「ろ」は，ドーナツのはんぶんにわれたのにしました。「く」の先に，みかんをつけました。「おやつすごろく」と上にかいて，スタートをどこにつけるかかんがえました。ちかみちや，なぞなぞをいっぱいつけて，やっとゴールをつけました。ゴールのつくえの上には，フルーツポンチとドーナツとチョコレートとオレンジジュースをかきました。

いろいろな，なぞなぞをかんがえていると，ほかのことが，ぜんぜんきになりませんでした。あたらしいペンで，じぶんでつくるまえは，とってもわくわくしました。

12月6日に，うちですごろくをつくりました。「めいろすごろく」と「おやつすごろく」です。「おやつすごろく」は，またちょっとかえました。うちでつくるのと，学校でつくるのとでは，学校でつくったほうが，おもしろいです。

4）　今後の課題

一年生という自己主張が強い3人グループの中では，十分に一人一人の主体性を伸ばしきれなかったのではないか。

また，児童への教師の助言のあり方として，あくまでも，児童の考えを中心としながらも，もう少し児童の中へ突っ込んで，助言を与えてやってもよかったのではないか。児童に任せるあまり，教師の存在感がほとんどなかった。

また，グループ構成など，児童の実態や変容をとらえて，行動面の追跡をして，今後の学級経営に役立てていきたいと考えた。

3　第2学年　生活科学習指導案

指導者　堤　　孝彦

(1)　単元　　おもちゃ作り

(2)　単元設定の理由

新学習指導要領に関連する事項

身の回りにある自然の材料などを用いて遊びや生活に使うものを作り，みんなで遊びなどを工夫することができるようにする。

1）学習内容設定のポイント

①　身のまわりにある自然の材料を使うことで，自然への関心を高める。

②　完成した作品のじょうず，へたが大事なのではなく作る活動そのものがたいせつである。

③　作品づくりにあたっての材料，道具の準備や使い方，後片付けも学習の一つとしてとらえる。

④　遊ぶ中で工夫する必要が生まれ，自分で考えたり友だちに知恵をもらったりしてともに学習を進めていく子どもの姿をたいせつにする。

2）学習内容設定の意義とねらい

子どもたちは，日ごろファミコンやプラモデルなど既製のおもちゃで遊びなれている。しかし，野外での遊びが大好きであり身近にあるものを遊びの材料にしてしまうことも多い。例えば，風の強い日にビニール袋をとばして追いかけることだけでも歓声をあげ，夢中になって遊ぶ。また，野外にでかけ，木の葉やどんぐりを拾い集めることにも意欲的で自然への関心を深めていく姿が見られる。

本時は，拾い集めたどんぐりを使ってけん玉を作らせたい。そして，けん玉を作る作業を通して，穴をあけたり，糸で結ぶ技能を身につけさせる機会を持たせたり，失敗・成功の経験からその原因を

確かめ，どの点を工夫したらよいか，あるいは，思いもよらぬアイディアにより成功した喜びを体験することができると思われる。

また，反対にうまくできない場合は，友だちや先生の援助が必要になり，お互いに意見交換をしつつ，自ら改善への機会を持つことにより，「みんなで知恵を出し合って，助けあって」という友とのかかわりの大切さも自然にわかるであろう。

作ること，遊ぶことを繰り返しながら，以上のようなことを自然に身につけさせけたいと思う。また，使った道具の片付けも学習の一つとして扱うようにしたい。

(3)　単元目標

1）ビニール袋で風を集めたり，風で紙をなびかせたりして，風で動くおもちゃを作り，工夫して遊ぶことができる。

2）校外に出かけ，落ち葉や木の実を集め，それらを使って工夫して遊ぶことができる。

(4)　指導計画　　（全13時間）

第1次　風で動くおもちゃ　　8

第2次　落ち葉や木の実の遊び　　5（本時 4／5 ）

(5)　本時の指導

1）ねらい　　木の実や身の回りの材料を使って，けん玉を作ることができるようにする。

2）展　開

教師の働きかけと援助	予想される児童の活動
よく入るけん玉を作ろう 教師の作ったけん玉を見せ，実演してみる。 一人でもグループでも，工夫してよく入るけん玉を作ろう。	・おもしろいな。 ・よく入るけん玉を作ってみよう。 ・一人で作る子や好きな子と作り始める子。
教師の準備するもの ・ニードル　・テープ　・糸 児童の準備するもの ・どんぐり　・割り箸やひご等の細い木 ・プリン類のカップ	
作業の様子を見ながら，指導する。 C 1，自分で工夫して作業を進めることができる子 C 2，友達のを見て作業をすすめる子 C 3，自分から作業をすすめられない子 みんなの前で，けん玉をためしてみよう。 この次は，けん玉大会を開こう。 後片付けをして，終わろう。	・どんぐりに穴をあけ，糸で結びカップをとりつける。 ・糸の結び場所やカップのとりつける所を見ながら進める。 ・見本のけん玉を見たり，先生に聞いたりする。 ・自分のけん玉で工夫したところを発表し，実演する。 ・それまでに，練習しておこう。

3）授業の観点　　5つのポイント

①　動機や目的を重視した活動

おもしろそうだ，やってみたいと感じる個々の児童の興味・関心を大切にしていたか。

②　追求活動・探求活動

自然な流れの中で活動がふくらんだり，深まったりする展開になっていたか。

③　表現活動による個性の表出の場

一人ひとりの感じ方や見方のちがい，よさが表れる場を積極的に設けたか。

④　情報交換の場

見付けたことや気付いたことを発表したり，報告したりする中で大切なことに気付かせたか。

⑤　学習の自立を目指した指導

自分自身の疑問や課題を自分なりのしかたで追求し表現できる児童をめざして指導を進めたか。

(6)　授業の反省から――感想と課題――

生活科の授業をしていく中で，常に考慮していたことは，いかにしたら子供たちに日常生活上必要な習慣や技能を身につけさせていったらよいかという点である。

今の子供たちは，普段の生活の中で，糸を結んだり，ナイフで削ったり，あるいは，ニードルで穴をあけたりすることは，きわめてまれである。

本単元である「おもちゃ作り」では，身の回りにある材料を用いて，遊び道具を作らせてみた。ここでは，作品化そのものよりも，カッターナイフ，ニードル，はさみ等の道具を上手に利用することが大切であると考えた。そこで，けん玉作りをすることにより，ニードルでどんぐりに穴をあけること，糸に結びつけること等の生活上の技能を身につけさせていきたいとの願いから，どんぐりを使ったけん玉作りをとりあげた。

しかし，「自立への基礎を養う」ことが，生活科の本質である。となると，どんぐりを使ったけん玉作りに限定したことが，はたして自立への基礎を養うことにつながっていくのか，ただ道具を扱う技能面のみの追求に終わったのではないのかという疑問が残る。

子供たちは，誰でも自分なりの願いをもっている。けん玉を作りたい子もいるであろうし，あるいは，やじろべいや首飾り等色々なものを作ってみたかったかもしれない。選択の幅をひろげることと，自分なりの創意工夫を働かせて物の製作をしていくことが，自立への基礎となるものであろう。創意工夫と選択の余地を残すことが，大切なことであると考えられる。

なお，指導案作成上，以下の4つの点を考慮に入れると，より生き生きとした生活科になるものと思われる。

①　おもしろそうだ，やってみようという気をおこさせる導入にする。

②　自分自身の課題に真剣に取り組める展開にする。

③　絵，動作，劇化等表現活動の中で，子供たち一人一人の個性を大切にする。

④　自分なりに工夫したり，苦労したりした点をお互いに発表し合う場を設ける。

七　平成元年度・生活科教育課程（試案）

岐阜教育大学附属小学校・生活科研究部会

Ⅰ　目標及び内容について

目　　標

①　具体的な活動や体験を通して，②自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち，自分自身や自分の生活について考えさせるとともに，③その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ，④自立への基礎を養う。

①　について

具体的な活動や体験を通して思考するという低学年児童の発達上の特徴を踏まえ，見たり，調べたり，作ったり，探したり，育てたり，遊んだりという直接体験を重視した学習活動を展開することによって，児童が学習の楽しさを味わい，意欲的な学習や生活ができるようになることをねらっている。

②　について

社会や自然を客観的にとらえて理解するという在り方（従来の社会科，理科の学習）でなく，あくまでも生活者として自分とのかかわりで社会や自然をとらえ，問題解決的な能力や態度を育てたり，自分と社会や自然との相互依存の関係に気づいたりし，さらに，そこでの自分の役割や行動の仕方について考え，それらが適切にできるようになることをねらっている。

③　について

今日の子どもたちがもつ問題，基本的な生活習慣や生活技能が身についていないことえの対応としての意味をもっている。

元来，基本的な生活習慣の形成は「道徳」の時間を核にして，教育活動全体を通じて指導することを基本にしており，生活科もその一翼を担うことになる。しかし，このねらいに表現されているように，その形成をストレートに目指すのではなく，あくまでも体験的な学習に即してそれらができるようになることをねらいとしている。

④　について

生活科の究極のねらいであり，生活科の具体的なねらいは前段の①～③によって示されている。

「自立への基礎を養う。」ことは，生活科に限ったことではない。しかし，他教科には特有なねらいがあって，前面に押し出してそれをねらっているわけではない。結果としてそこへいくということである。それに対して生活科では，自立への基礎を養うことをストレートに目指す中核的な教科であるという意味合いをもつ。

(1)　第1学年及び第2学年目標

① 自分と学校，家庭，近所などの人々及び公共物とのかかわりに関心をもち，集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え，適切に行動することができるようにする。
② 自分と身近な動物や植物などの自然とのかかわりに関心をもち，自然を大切にしたり，自分たちの遊びや生活を工夫したりすることができるようにする。
③ 身近な社会や自然を観察したり，動植物を育てたり，遊びや生活に使うものを作ったりなどして活動の楽しさを味わい，それを言葉，絵，動作，劇化などにより表現できるようにする。

① について

「自分と身近な社会とのかかわり」を中心として，それに「自分自身や自分の生活を考えること」及び「生活上必要な習慣や技能を身につけること」を合わせて表現したものと考えられるが，能力目標が「……に関心をもち，……について考え，適切に行動することができるようにする」と示されるように，子どもがこれらの内容を身につけて自立的な生活者，行動者となることが期待されている。

この目標①は，しいていえば現行の社会科に相当する部分とも考えられるが，そこでは能力目標が「……に気づかせる」こと，「……意識をもつようにさせる」こと，「……観察させ，効果的に表現させる」こととされているのとはきわめて異なっている。

② について

「自分と身近な自然とのかかわり」を中心にして，それに「自分自身や自分の生活を考えること」及び「生活上必要な習慣や技能を身につけること」を合わせて表現したものと考えられるが，ここでも能力目標は「……関心をもち，……大切にしたり，……工夫したりすることができるようにする」というように生活自立者的な表現がされている。現行の理科で表現される「気づかせる」「楽しさを味あわせる」目標とは異なっている。

③ について

ねらいの「具体的な活動や体験を通して……」という方法自体が内容化，目標化されたものと考えられるが，ここでも「活動の楽しさを味わう」とか，それを自己「表現する」という自立的生活者としてのあり方が求められていると考えられる。

したがって，体験的な学習を通して，自ら学ぶ意欲や主体的な学習の仕方を身につけさせようとする，いわゆる『自己教育力』の育成が生活科にとって不可欠な目標とされているのではないかと考えたい。

1）　第1学年内容

① 学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のことが分かり，学校において楽しく遊びや生活ができるようにするとともに，通学路の様子などについて調べ，安全な登下校ができるようにする。

② 家庭生活を支えている家族の仕事や家族の一員として，自分でしなければならないことが分かり，自分の役割を積極的に果たすとともに，健康に気をつけて生活することができるようにする。

③ 近所の公園などの公共施設は，みんなのものであることが分かり，それを大切に利用することができるようにするとともに，身近な自然を観察し季節の変化に気付き，それに合わせて生活することができるようにする。

④ 土，砂などで遊んだり，草花や木の実など身近にあるもので遊びに使うものを作ったりして，みんなで遊びを工夫することができるようにする。

⑤ 動物を飼ったり植物を育てたりして，それらも自分たちと同じように生命をもっていることに気付き，生き物への親しみをもち，それを大切にすることができるようにする。

⑥ 入学してから，自分でできるようになったことや日常生活での自分の役割が増えたことなどが分かり，意欲的に生活できるようにする。

2） 第2学年内容

① 自分たちの生活は，近所の人や店の人など多くの人々とかかわっていることが分かり，日常生活に必要な買い物や使いをしたり，手紙や電話などで必要なことを伝えたりするとともに，人々と適切に応対することができるようにする。

② 乗り物や駅などの公共物の働きやそこで働いている人々の様子が分かり，安全に気を付けて，みんなで正しく利用することができるようにする。

③ 季節や地域の行事にかかわる活動を行い，四季の変化や地域の生活に関心をもち，また，季節や天候などによって生活の様子が変わることに気付き，自分たちの生活を，工夫したり楽しくしたりすることができるようにする。

④ 身の回りにある自然の材料などを用いて，遊びや生活に使うものを作り，みんなで遊びなどを工夫することができるようにする。

⑤ 野外の自然を観察したり，動物を飼ったり植物を育てたりして，それらの変化や成長の様子に関心をもち，また，それらは自分たちと同じように成長していることに気付き，自然や生き物への親しみをもち，それらを大切にすることができるようにする。

⑥ 生まれてからの自分の生活や成長には，多くの人々の支えがあったことが分かり，それらの人々に感謝の気持ちをもち，意欲的に生活することでできるようにする。

II 指導計画の作成について

(1) 指導計画の作成と内容の取り扱い等の視点

① 第1学年及び第2学年の内容については，地域や学校の実態を考慮して必要がある場合には，学年別の順序によらないことができる。

② 学習の素材については，地域の社会や自然を生かし，自分とそれらのかかわりが具体的に把握できるものを取り上げること。

(2) 生活科の目標を達成するために，内容選択の基本的な視点を，1．自分と社会とのかかわり 2．自分と自然とのかかわり，および，3．自分自身のこととする。

基本的な視点にもとづき，児童の実態に即し，例えば，健康で安全な生活，身近な人々との接しかた，公共物の利用，生活と消費，情報の伝達，身近な自然との触れ合い，季節の変化と生活のかかわり，物の製作，自分の成長，基本的な生活習慣や生活技能などを具体的な視点として内容を選択する。

	基本的な視点	基本的な内容	1学年の内容	2学年の内容
自分	社会とのかかわり	(1) 健康で安全な生活	(1) (2) (4) (6)	(2)
		(2) 身近な人々との接し方	(1) (2)	(1)
		(3) 公共物の利用	(3)	(2)
		(4) 生活と消費		(1)
		(5) 情報の伝達		(1)
		(7) 季節の変化と生活とのかかわり	(3)	(3)
	自然とのかかわり	(6) 身近な自然との触れ合い	(3) (5)	(5)
		(8) 物の製作	(4)	(4)
	自分自身	(9) 自分の成長	(6)	(6)
		(10) 日常生活に必要な生活習慣や生活技能	(1)～(9)と関連して扱う	

III　第１学年　生活科単元一覧表

岐阜教育大学附属小学校

月	時間	単　元　名	１年の生活科指導内容
4月	8	1　私たちの学校　（14時間）	(1)　ア．学校の施設と生活を支えている人々 イ．学校での楽しい遊びや生活 ウ．スクールバス（通学路）と安全な登下校
5月	10		(3)　ア．スクールバス（公共施設）とその利用 (4)　ウ．みんなと遊びの工夫
6月	12	2　子ども動物園　（12時間）	(5)　ア．動植物の飼育、栽培 イ．動植物の生命に気付く ウ．生き物に親しみ大切にする (3)　イ．自然の観察
7月	6 （36）	3　七夕まつり　（12時間）	(1)　イ．学校での楽しい遊びや生活 (3)　イ．季節の変化とそれに合った生活 (6)　ア．自分の成長 イ．学校や家庭での意欲的な生活
9月	10		(2)　ア．家族の仕事，家族の一員としての自分 イ．家庭における役割分担、健康な生活
10月	12	4　みんなの公園　（10時間）	(3)　ア．公共施設とその利用 (4)　ア．土、砂などで遊ぶ ウ．みんなと遊びの工夫
11月	12	5　秋の野原　（18時間）	(3)　イ．自然の観察 (4)　イ．草花などを使って遊びの工夫 (5)　ア．動植物の飼育 イ．動植物の生命に気付く ウ．生き物に親しみを持ちそれを大切にする
12月	6 （40）	6　楽しいお正月　（12時間）	(2)　ア．家族の仕事、家族の一員としての自分 イ．家庭における役割分担，健康な生活 (3)　イ．季節の変化とそれに合った生活
1月	9	7　おもちゃランド（13時間）	(1)　イ．学校での楽しい遊びや生活 (4)　ウ．みんなと遊びの工夫
2月	12	8　もうすぐ２年生（14時間）	(1)　ア．学校の施設と生活を支えている人々 (6)　ア．自分の成長 イ．学校や家庭での意欲的な生活
3月	8 （29）		
	（105）	（105時間）	

1　私たちの学校（全14時間）

附属小学校　1年　生活科カリキュラム

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 みんななかよし 4時間	先生や友達の似顔絵をかいたり，遊具を使って仲良し遊びをしながら，みんなで仲良く生活できるようにする。	1　私の先生（1時間） ・先生の話を聞く。 家族，通勤方法，趣味…… ・先生の似顔絵をかく。 似顔絵，氏名，年令 ・お母さんに先生の話をする。	
		2　学級の友だち（1時間） ・室内で歌遊びをする。 二重円で相手をかえながら ・歌遊びをした絵をかく。 友だちになった人を中心に歌遊びの絵をかく	大きなクリの木の下で ＊あそびの事典 — 215 —
		3　運動場での遊び（1時間） ・子とり遊びの遊び方を知り，「花いちもんめ」の歌の練習をする。 ・グループに分かれて子とり遊びをする。 ・グループをかえて子とり遊びをする。	花いちもんめ ＊あそび事典 — 72 —
		4　道具の使い方（1時間） ・運動場にある遊具の使い方を知る。 ・遊具を使って自由遊びをする。	
2 学校たんけん 4時間	学校たんけんや学校で働く人々の様子をしらべたりしながら，施設の使い方や学校のきまりを身につける。	1　学校めぐり（1時間） ・先生と施設めぐりをする。 ・施設の使い方のきまりを知る。 ・学校にあった施設の名前を話し合う。	
		2　学校たんけん（2時間） ・もっとくわしく調べたい施設や，授業の様子を見学したい学年を発表する。 ・グループに分かれ，自分の調べたい施設をたんけんする。 ・施設や授業の様子を絵にかく。 ・先生といっしょに学校の絵地図を作る。	黒板に校舎の図をかき，その中に絵をはりつける。
		3　学校で働く人（1時間） ・給食配膳室に行って用務員のおじさんの話を聞く。 ・保健室に行って養護の先生の話を聞く。 ・職員室に行って校長先生や教頭先生の話を聞く。	
		1　スクールバス ・号車に分かれて，担当の先生からスクールバスの利用のしかたときまりについて聞く。	全校のバス指導の時間

3 安全な登下校 4時間	運転手のおじさんの話を聞いたり，学園めぐりをしながら，安全な歩行とスクールバス利用のきまりを身につけさせる。	2　私の通学路（1時間） ・バス停から家までの通学路について話し合う。 横断歩道，信号，車の走る道 ・バス停から家に帰るまでの模擬活動をする。 お母さん，運転手，自動車，1年生	
		3　学園めぐり（2時間） ・学園めぐりと集団歩行のきまりについて話を聞く。 ・集団歩行の練習をする。 ・先生といっしょに学園めぐりをする。	春の遠足と関連づけて実施する
4 私の学校 2時間	学校での生活の様子を話したり，手紙に書いたりしながら，入学の喜びを味あわせる。	1　たのしい学校（1時間） ・学校生活で楽しかったことや発見したことを話し合う。 ・学校での生活の様子を絵にかく。	
		2　おかあさんへの手紙（1時間） ・学校生活で楽しかったことや発見したことを手紙に書く。 ・学校での生活の様子をお母さんに伝える。 手紙と絵	

2　子ども動物園（全12時間）

附属小学校1年　生活科カリキュラム

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 草花遊び 3時間	神明の森で草花を集めたり，草花の首飾りを作ったりしながら，春の草花に親しませる。	1　神明の森（2時間） ・神明の森へいって，いろいろな草花を集める。	
		2　いろいろな草花（1時間） ・首飾りを作ったり草花遊びをする。	ささ舟，タンポポの風車，ペンペン草など
2 大江川の生き物 4時間	大江川に行って，生き物をとったり，ザリガニの家を作ったりしながら，川に住む生き物の特徴に気づかせる。	1　大江川（3時間） ・大江川へ行って，いろいろな生き物をつかまえる。 ・つかまえた生き物の絵をかく。 ・かいた絵を黒板にはつて，大きな川を作る。	
		2　ザリガニの家（1時間） ・ザリガニをつかまえて，ザリガニのすみかを作る。 ・ザリガニにえさをやる。	ソーセージやミミズなどのえさ

3 動物となかよし 5時間	ウサギ，ニワトリなどの世話をしたり，絵をかいたりしながら，動物の体の動きの特徴に気づくとともに動物をかわいがろうとする気持ちを育てる。	1 いろいろな動物（2時間） ・先生から動物の世話の仕方を聞く。 ・ウサギやニワトリなどの動物と遊ぶ。	
		2 ウサギの世話（1時間） ・ウサギにえさをあげて世話をする。	
		3 ウサギのえさ（2時間） ・ウサギのえさにはどんなものがあったか思い出す。 ・ウサギのえさを育てる。 ・ウサギと遊んだ絵をかく。	サツマイモ・ダイコンなどを育てる。

3　七夕祭り（全12時間）

附属小学校1年　生活科カリキュラム

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 ひこ星と織り姫 2時間	ひこ星と織り姫の伝説を聞いたり，たんざくに願い事を書いたりしながら，日本の伝統的な行事に関心を持たせる。	1 七夕の話（1時間） ・ひこ星と織り姫についての伝説を聞く。 ・天体投影機を使ってひこ星と織り姫を見る。	児童図書440コ「宇宙のふしぎふしぎ物語」 児童図書440ム「宇宙」
		2 私の願い（1時間） ・五色のたんざくに願い事を書いてササにつるすと，願い事がかなうことを話し合う。 ・どんな願い事があるのか話し合う。 ・願い事をたんざくに書く。	
2 たのしい七夕祭り 6時間	七夕飾りを作ったり，七夕祭りをしながら，夏の自然や行事に親しませる。	1 七夕飾り（3時間） ・七夕祭飾りの作り方を聞く。 ・グループに分かれて七夕飾りを作る。 ・ササに七夕飾りを飾る。 ・七夕祭りの計画をたてる。 ・グループで発表の練習をする。	ナスなどの野菜を使って動物飾りを作ってもよい。
		2 七夕祭り（3時間） ・七夕の歌を歌う。 ・グループ順に発表する。 ・七夕飾りをみんなで分ける。 ・七夕飾りを家に持って帰り，お母さんに七夕祭りの話をする。	

3 もうすぐ夏休み 4時間	家での一日の生活の様子を絵巻物にしたり，模擬活動をしながら，家庭生活のきまりや習慣に気づかせるとともに，より良い生活を送ろうとする意欲を育てる。	1　一日の生活（1時間） ・家での一日の生活の様子を話し合う。 一日の生活を板書 ・家での生活について模擬活動をする。 お母さん，私，お父さん……	
		2　楽しい夏休み（1時間） ・夏休みについての話しを聞く。 ・夏休みの計画をたてる。 一日の日課（絵）	
		3　思い出の夏休み（2時間） ・楽しかった夏休みの様子について話し合う。 ・夏休みの一日の様子を絵巻物にかく。 ・絵巻物を壁面に展示しする。	

4　みんなの公園（全10時間）

附属小学校　1年　生活科カリキュラム

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 高桑公園 4時間	高桑公園の施設を使って仲良し遊びをしたり，公園めぐりをしながら，公園は人々が仲良く楽しむ所であることに気づかせ，施設の使い方を身につけさせる。	1　公園めぐり（2時間） ・公園めぐりをする。 ・公園の施設や遊具の使い方を知る。	
		2　公園での遊び（2時間） ・公園の遊具を使って遊ぶ。	
2 楽しい公園づくり 6時間	学校の砂場にスベリ台などの遊具を作ったり，粘土で高桑公園を作ったりしながら，土や砂を使った遊びを工夫させる。	1　砂遊び（2時間） ・公園にあるものを発表する。 ・砂場で公園にあるものを作って遊ぶ。	
		2　粘土の遊具（2時間） ・粘土で公園の遊具や友達を作る。	
		3　公園づくり（2時間） ・ボール紙を使って箱庭公園を作る。 ・箱庭の公園に粘土の遊具をかざる。 ・みんなの作った公園を見る。	グループで大きな公園を作る。

5　秋の野原（全18時間）

附属小学校　1年　生活科カリキュラム

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 虫と仲良し 6時間	学校近辺の野原で，コオロギやバッタなどの昆虫を採ったり，コオロギの家を作ったりしながら，野原に住む生き物の特徴を気づくとともに，動物をかわいがろうとする気持ちを育てる。	1　いろいろな虫（2時間） ・虫について知っていることを話し合う。 名前，住みか，食べ物 ・野原に行き，虫を探す。 ・コオロギを採る。	
		2　コオロギの家（2時間） ・コオロギはどんな場所にいたのか話し合う。 ・コオロギの住みかを作る。 ・コオロギにえさをやる。	コオロギのえさ キュウリ ナス，にぼし けずりぶし
		3　粘土の虫（2時間） ・粘土で虫を作る。 ・粘土の虫を箱庭に展示する。	
2 秋の木の実 6時間	神明の森でいろいろな木の実を集めたり，ドングリごまを作ったりしながら，木の実を使ったおもちゃを工夫させる。	1　神明の森（2時間） ・神明の森に行き，春に探した草花やまわりの様子がどのように変わったのかを見つける。 ・いろいろな木の実を集め，教室の壁面の木の下に展示する。	
		2　いろいろな木の実（2時間） ・木の実で作ったいろいろな飾りやペンダントを見る。 ・いろいろな木の実を集め，飾りやペンダントなどを作ることを知る。 ・神明の森に行って，いろいろな木の実を集める。	写生大会と関連づけ，金華山でドングリ，シイなどをひろうとよい
		3　ドングリごま（2時間） ・ドングリごまやドングリの首飾りなどを見る。 ・こまや首飾りなどの作り方を知る。 ・こまや首飾りなどを作る。	ドングリごま ドングリ人形

3 秋の草花 6時間	神明の森でいろいろな落ち葉を集めたり，落ち葉飾りを作ったりしながら，秋の野原の特徴や変化の様子をとらえさせる。	1　いろいろな草花（2時間） ・神明の森に行って，いろいろな落ち葉を集める。 ・集めた落ち葉を教室の壁面の木の下に展示する。	
		2　落ち葉集め（2時間） ・イチョウで作った落ち葉飾りを見る。 ・神明の森に行って，飾りを作るための落ち葉を集める。	
		3　落ち葉飾り（2時間） ・いろいろな落ち葉を使って，落ち葉飾りを作る。 ・作った落ち葉飾りを家に持って帰り，お母さんに神明の森の話をする。	

6　楽しいお正月（全12時間）

附属小学校　1年　生活科カリキュラム

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 私の家族 2時間	お父さんやお母さんが働いている様子を絵にかいたり，お手伝いの模擬活動をしながら，家族の一員としての自覚を持たせる。	1　私のお父さんお母さん（1時間） ・自分の家族を紹介し合う。 ・お父さんやお母さんが働いている絵をかく。 ・絵を見せながら，お父さんやお母さんの仕事ぶりを発表する。	
		2　私ができる仕事（1時間） ・お母さんやお父さんの願いを聞いてくる。 ・家でしているお手伝いや，お父さんやお母さんの願いについて話し合う。 ・家でしている自分の仕事の様子を絵や動作化で表す。 ・他に自分ができる仕事として電話の応対やお使いなど，ごっこ活動をする。 ・お手伝いのがんばり表を作る。 ・家でお手伝いをする。	

2　もうすぐ冬休み 4時間	一年間のくらしのカレンダーを作ったり，冬休みの生活について話し合いながら，健康で安全なくらしがおくれるようにする。	1　くらしのカレンダー（3時間） ・色々なカレンダーを紹介する。 ・カレンダーの必要性を話し合う。 ・私達のカレンダー作りを話し合う。 ・12カ月の行事を思い出したり，考えたりする。 ・12カ月のくらしのカレンダー作りを話し合う。 ・みんなで12カ月を分担する話し合いをする。 ・くらしのカレンダー作りを始める。 ・みんなで分担して，くらしのカレンダーを仕上げる。 ・できあがったカレンダーを発表する。	
		2　楽しい冬休み（1時間） ・先生からお正月についての話しを聞く。 ・去年のお正月を思い出して話をする。 ・冬休みの生活やきまりについて話し合う。	
3　お正月遊び 6時間	すごろく作りをしたり，いろいろな正月遊びをしながら，冬の行事や自然の特徴に気づかせる。	1　いろいろな遊び（2時間） ・いつもの遊びとお正月の遊びについて話し合う。 ・自分のしたいお正月の遊びについて話し合う。 ・昔のお正月の遊びを調べたり，聞いたりしたことを紹介する。 ・友達と仲良くカルタやこままわしや凧あげをして遊ぶ。	
		2　すごろく作り（4時間） ・今年のお正月の様子や遊びを絵にかいて発表する。 ・すごろく遊びを紹介する。 ・すごろく遊びをする。 ・自分で工夫しながらすごろくを作る。 ・友達とすごろくで遊ぶ。	

7　おもちゃランド（全13時間）

附属小学校　1年　生活科カリキュラム

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 紙のおもちゃ 3時間	色紙や半紙を使って紙飛行機やトントンずもうを作って遊び，紙を工夫して作ったり遊んだりする楽しさを味あわせる。	1　紙ひこうき（1時間） ・先生の作った紙ひこうきを見る。 ・紙ひこうきの作り方を知る。 ・色紙や広告紙で紙ひこうきを作って遊ぶ。	
		2　トントンずもう（2時間） ・先生の作ったトントンずもうを見る。 ・トントンずもうの作り方を知る。 ・画用紙や箱を使ってトントンずもうを作る。 ・友達や先生とトントンずもうをして遊ぶ。	
1 かんポックリ 4時間	空き缶を使って，缶ポックリやゴムの力で走る車を作って遊び，ゴムの働きに気づかせるとともに，きまりを守って自動車レースをする楽しさを味あわせる。	1　缶ポックリ（2時間） ・先生の作った缶ポックリを見る。 ・缶ポックリの作り方を知る。 ・先生といっしょに缶ポックリを作る。 ・缶ポックリで遊ぶ。	
		2　走る車（2時間） ・先生の作った車が走るのを見る。 ・ゴムで走る車の作り方を知る。 ・よく走る車を工夫して作る。 ・走った車を使って自動車競走をする。	
3 ダンボールの国 6時間	ダンボール箱を使って，おもちゃの城やタンクを作って遊び，みんなで協力して作ることの大切さに気づかせる。	1　ダンボールの城（3時間） ・ダンボール箱を使っておもちゃの城を作ることを話し合う。 どんな城を作るのか 城のどこを作るのか ・みんなで協力しておもちゃの城を作る。 ・できた城に飾り付けをする。 ・城の中に入って遊ぶ。	
		2　ダンボールのタンク（3時間） ・先生の作ったダンボールのタンクを見る。 ・タンク作りについて話し合う。 グループ分け ・グループで協力してダンボールのタンクを作る。 ・作ったタンクで競走して遊ぶ。	

8　もうすぐ2年生（全14時間）

附属小学校　1年　生活科カリキュラム

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 一年間の思い出 4時間	1年間の思い出のアルバムを作ったり，楽しかった思い出を手紙に書いたりして，自分の一年間の成長に気づかせる。	1　思い出のアルバム（3時間） ・4月から今までの自分のくらしの中で，心に残っていることを絵や文で表す。 ・絵や文をみんなで発表しあう。 ・アルバムの表紙を作る。 ・友達と見せ合う。	
		2　楽しかった1年生（1時間） ・楽しかった思い出を手紙に書く。 ・アルバムと手紙をお母さんにわたす。	
2 私の発表会 4時間	お世話になった人々を学習発表会に招待し，感謝の気持ちが表現できるようにする。	1　こんなことができた（1時間） ・入学してからできるようになったこの1年間の自慢を発表しあう。	
		2　発表会（3時間） ・どんな学習発表会にするかを話し合う。 ・学習発表会の計画をたてる。 ・おうちの人やお世話になった人に招待状を書く。 ・学習発表会の練習をする。 ・学習発表会の準備をする。 ・学習発表会をする。	
3 新一年生 6時間	新一年生を迎える計画や準備をしながら，2年生への進級の喜びを味わわせ，新一年生への思いやりの心を養う。	1　新1年生への手紙（3時間） ・学校のことを絵や文で紹介する手紙を書く。 ・お祝いの気持ちを込めて，新一年生が喜んでくれる様なプレゼントを作る。 ・どんなプレゼントにするかを話し合う。 ・丁寧にプレゼントを作り最後までする。	
		2　教室かざり（3時間） ・教室かざりの計画を立てる。 ・花紙で花の作り方を聞く。 ・ちぎり絵の作り方を聞く。 ・色紙や花紙で花を作ったり，おめでとうの文字を作ったりする。 ・輪かざりの作り方を聞く。 ・輪かざりを作る。 ・飾り付けをする。	

Ⅳ　第2学年　生活科単元一覧表

岐阜教育大学附属小学校

月	時間	単　元　名	2年の生活科指導内容
4月	8	1　私たちの学園　（9時間）	(1)　ア．自分たちの生活と近所とのつながり (5)　ア．野外観察，動植物の飼育・栽培 イ．自然の変化と動植物の成長の様子 ウ．自然，生き物へ親しみ大切にする
5月	10	2　私たちの水族館（6時間）	(5)　ア．野外観察，動物の飼育 イ．自然の変化と動物の成長の様子 ウ．自然，生き物へ親しみ大切にする
6月	12	3　お店屋さん　（12時間） 4　私たちの農園　（3時間）	(1)　ア．自分たちの生活と近所の人や店の人とのつながり イ．日常生活の買い物・使い エ．人々との適切な応対 (5)　ア．野外観察，植物の栽培 ウ．自然，植物への親しみ大切にする
7月	6 (36)	5　雨の日の遊び　（6時間）	(3)　イ．季節や天候による生活の様子の変化 ウ．生活の工夫，楽しい生活
9月	10	6　秋の虫　秋の草（9時間）	(5)　ア．野外観察，動植物の飼育・栽培 イ．自然の変化と動植物の成長の様子 ウ．自然，生き物へ親しみ大切にする
10月	12	7　取り入れ祭り　（11時間）	(3)　ア．季節や地域の行事にかかわる活動 ウ．生活の工夫，楽しい生活 (5)　ア．野外観察，植物の栽培 イ．自然の変化と植物の成長の様子 ウ．自然，生き物へ親しみ大切にする
11月	12	8　おもちゃ作り　（13時間）	(4)　ア．遊びや生活に使うものを作る イ．みんなと遊びの工夫
12月	6 (40)	9　もうすぐお正月（7時間）	(1)　ウ．手紙や電話での伝達 (3)　ア．季節や地域の行事にかかわる活動 イ．季節や天候による生活の様子の変化 ウ．生活の工夫，楽しい生活
1月	9	10　お正月の遊び　（8時間）	(3)　ア．季節や地域の行事にかかわる活動 ウ．生活の工夫，たのしい生活
2月	12	11　乗り物　（6時間）	(2)　ア．公共物の働きとそこに働く人の工夫や努力 イ．公共物の安全な正しい共同利用
3月	8 (29)	12　私のアルバム　（15時間）	(6)　ア．自分の成長と多くの人の支え イ．人々への感謝，意欲的な生活
	(105)	(105時間)	

1　私たちの学園（全9時間）

附属小学校　2年　生活科カリキュラム　No.1

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　考
1 春の野や田畑 2時間	学園の近くの堤防や，田畑に出かけて，春の様子に気付いたり，楽しんだりすることができる。	1　春の草（1時間） ・堤防でつくしを摘む。 ・畦道を歩きながらたんぽぽぶえを作り遊ぶ。	境川の堤防や周りの田畑
		2　春の虫（1時間） ・学園の周りにいるちょうちょや虫を探して遊ぶ。	
2 学園の周りの施設 5時間	学園の付近を見て回り，どんな建物や施設があるかに関心を持つことができる。	1　学園の東（1時間） ・ビニールハウスや運輸会社	
		2　学園の西（1時間） ・神社や木材市場	
		3　学園の南（2時間） ・高桑公園や神社 ・高桑のバス停でバスの行き先と時間を調べる。	
		4　流通センター（1時間） ・公園や建物がたくさんあることを知る。 ・バス停では1時間何本のバスが出ているか調べる。	
3 生活マップ 2時間	学園の周りで見てきたものや気付いたことを生活マップに記入することができる。	1　マップ作り（2時間） ・花を摘んだり虫を見付けたりした場所に絵をかく。 ・気付いたことをマップに書き入れる。	学園の周りの絵地図

2　私たちの水族館（全6時間）

附属小学校　2年　生活科カリキュラム　No.2

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　考
1 水辺の生き物 4時間	小川や用水路に出かけて行き，水の中の生き物を見付けたり，捕まえたりすることができる。	1　小川や用水路（1時間） ・学園の周りの小川や用水路に行き，水の中の生き物を見付ける。	
		2　水辺の生き物（2時間） ・水の中に入りザリガニやおたまじゃくし等の生き物を捕まえる。	たも　バケツ ゴムぞうり　着替え等
		3　マップ作り（1時間） ・生き物のいた場所を生活マップに記入する。	生活マップ

2 水族館作り 2時間	水族館を作り，水の中に住む生き物に関心を持つことができる。	1　水族館（2時間） ・捕まえてきたザリガニと遊び，水の中に住む生き物を大切に飼いたいという気持ちを持たせる。 ・水そうの中に水・水草・石等を入れ，住んでいた所と同じような環境にする。	水そう 飼っていた生き物は，元の場所に戻す。

3　お店屋さん（全12時間）

附属小学校　2年　生活科カリキュラム　No.3

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 買い物 1時間	買い物をしたときの様子を思い出して話し合い，買い物に関心を持つことができる。	1　買い物（1時間） ・おうちの人と一緒に買い物に行ったときの様子について話し合う。 ・よく買い物に行く店について話す。 ・店の人やお客さんについて話す。	
2 店の見学 2時間	スーパーマーケットを見学して，店内や買い物客の様子に関心を持ち，自分で買い物をすることができる。	1　タマコシ柳津店（2時間） ・グループに分かれ，店の中を見学する。お客さんの様子やレジでのお金の払い方を見学する。 ・300円以内で遠足のおやつを上手に買う。	静かに店内を見学する。
3 商店街の見学 5時間	色々なお店が集まっている商店街を見学して，専門店の様子や買い物客の様子に関心を持つことができる。	1　見学の相談（1時間） ・商店街の見学の相談をする。	
		2　大垣商店街の見学（4時間） ・たくさん店の並んでいる様子を見学する。 ・店の様子や売っている品物を調べる。 ・店に出入りする人の様子を見学する。 ・専門店の人に話しを聞く。 ・歩道が広く，買い物に便利になっていることに気付く。	他のお客さんやお店の人に迷惑をかけないようにする。

4 お店屋さんごっこ 4時間	買い物をしたことや見学したことを思い出し，工夫してお店屋さんごっこをすることができる。	1　お店屋さんごっこの相談（1時間） ・どんなお店屋さんになるのか，話し合う。	
		2　お店屋さんの準備（1時間） ・お店屋さんで売る物やお金等の準備をする。	紙等で作る。
		3　お店屋さんごっこ（2時間） ・お店屋さんとお客さんとに交代で分かれる。 ・お客さんに品物の説明をしたりおつりを渡したりする。 ・お客さんは上手に品物を買うようにする。	教室で机を並べお店屋さんらしくする。

4　私たちの農園（全3時間）

附属小学校　2年　生活科カリキュラム　No. 4

小単元	目　標	学　習　活　動	備　考
1 野菜作り 3時間	プチトマトの種をまいたり，さつまいもの苗を植えたりして野菜作りを通して植物の成長に関心を持つことができるようにする。	1　プチトマト（1時間） ・プチトマトの種を観察する。 ・育苗ポットに土を入れる。 ・種をまく。	プチトマトの種 育苗ポット シャベル
		2　さつまいも（2時間） ・農園の土をやわらかくする。 ・さつまいもの苗を観察する。 ・苗の植えかたを知り，上手に植える。 ・世話のしかたを話し合う。	さつまいもの苗 シャベル

5　雨の日の遊び（全6時間）

附属小学校　2年　生活科カリキュラム　No. 5

小単元	目　標	学　習　活　動	備　考
1 雨の日の遊び 5時間	雨の日の遊びを工夫し，仲良く落ち着いた暮らしができるようにする。	1　雨降り探検（1時間） ・雨の日に学校の近くや校庭を探検し，かたつむり等の動く様子を観察する。	雨具の用意
		2　雨の日の遊びかた（1時間） ・教室での遊びかたについて考える。	
		3　粘土（1時間） ・粘土で好きな形を作ったりして遊ぶ。	
		4　折り紙（2時間） ・折り紙や切り紙で花や動物を作って遊ぶ。	

2 梅雨時の衛生 1時間	雨の日と自分たちの健康，生活とのかかわりに気付くことができる。	1　健康な体（1時間） ・ぬれた体をふいたり，衣服をとりかえたりする。 ・梅雨時の食べ物や飲み物等衛生について知る。	タオルや着替え

6　秋の虫や植物（全9時間）

附属小学校　2年　生活科カリキュラム　No.6

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 秋の野や田畑 2時間	秋の様子を観察し，季節の移り変わりに気付くことができる。	1　秋の野（1時間） ・堤防や神社で秋の草花を見付ける。	境川の堤防
		2　秋の田畑（1時間） ・学校の周りの田畑を観察し夏のころとの違いに気付く。	
2 秋の虫 3時間	秋には色々な虫がいることに気付き，興味をもって観察することができる。	1　虫採り（2時間） ・虫のいる所をさがして，採りに出かける。 イナゴ　バッタ　コオロギ等 ・虫のとびかたを観察し，まねをして遊ぶ。	
		2　虫の家（1時間） ・虫たちの家を作り，上手に育てる。	虫かご　草 牛乳パック　缶
3 マップ作り 2時間	秋の虫や草花の様子を生活マップに記入することができる。	1　マップ作り（2時間） ・虫のいた場所や草花の様子をマップに記入する。 ・気付いたことをマップに書き入れる。	生活マップ
4 農園の様子 2時間	春から育ててきたプチトマトやさつまいもの成長を喜び，進んで世話ができる。	1　プチトマト（1時間） ・倒れないように支柱を立てたり，水をやったりして世話をする。	支え棒
		2　さつまいも（1時間） ・さつまいも畑の草取りをして世話をする。	

7　取り入れ祭り（全11時間）

附属小学校　2年　生活科カリキュラム　No.7

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 計画と準備 2時間	みんなで育てたプチトマトやさつまいもの成長を喜び，取り入れ祭りに期待をもつことができる。	1　計画（1時間） ・楽しく取り入れ祭りができるように話し合う。 ・歌　ゲーム　クイズ等 ・仕事の役割分担を決める。	
		2　準備（1時間） ・取り入れ祭りができるように協力して仕事をすすめる。	
2 収穫 6時間	大きくなったトマトやさつまいもを収穫し，絵にかいたり数えたりして，みんなで育てた喜びを味わうことができる。	1　トマトの実（1時間） ・トマトの実のついている様子を観察し絵にかく。	
		2　取れ高（1時間） ・実を収穫しいくつ取れたかを数えグラフにかく。	はさみ
		3　トマトの試食（1時間） ・トマトをサラダにして，みんなで食べる。	お皿　マヨネーズ
		4　さつまいも（1時間） ・農園に出かけて行き，さつまいもの育っている様子を観察し絵にかく。	
		5　いもほり（2時間） ・いもほりをし，取れ高を調べる。	シャベル
3 取り入れ祭り 3時間	プチトマトやさつまいもの世話を振り返ったり，収穫したものを食べたりしながら，自然のめぐみに感謝することができる。	1　いもの準備（1時間） ・いもをふかしたり焼いたりする。	家庭科室
		2　取り入れ祭り（2時間） ・計画に従って取り入れ祭りを楽しむ。 はじめの言葉 取れ高や世話の様子を話す 歌やゲーム 会食 おわりの言葉	教室　運動場

8　おもちゃ作り（全13時間）

附属小学校　2年　生活科カリキュラム　No. 8

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 風で動くおもちゃ 8時間	ビニール袋で風を集めたり，風で紙をなびかせたりして，風で動くおもちゃを作り工夫して遊ぶことができる。	1　ビニール袋とばし（1時間） ・運動場でビニール袋に風を集めたり，とばしたりして遊ぶ。	
		2　手で持って遊ぶおもちゃ（2時間） ・ふきながし，風車，風輪等を作って遊ぶ。	色紙　画用紙 竹ひご等
		3　風で走るおもちゃ（3時間） ・身の回りの材料を使って，風をよく受けて走る車を作る。	ダンボール　竹ひご　ストロー
		4　カーレース（2時間） ・風で走る車をグループごとに走らせて遊ぶ。 ・カーレースをして楽しく遊ぶ。	
2 落ち葉や木の実の遊び 5時間	校外に出かけ，落ち葉や木の実を集めそれらを使って工夫して遊ぶことができる。	1　落ち葉，木の実拾い（2時間） ・山や神社でどんぐり，落ち葉拾いをする。	岐阜公園
		2　木の葉のかげえ（1時間） ・木の葉を組み合わせて形を作り，それをOHPに映して遊ぶ。	OHPスクリーン
		3　けん玉作り（1時間） ・どんぐりのけん玉を作って遊ぶ。	糸　割り箸 カップ等
		4　けん玉大会（1時間） ・みんなでルールを決めて，誰のがよく入るか競争する。	

9　もうすぐお正月（全7時間）

附属小学校　2年　生活科カリキュラム　No. 9

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 冬の様子 1時間	学校の周りの田畑にも冬の訪れたことがわかり，秋との生活の変化に気付くことができる。	1　学校の周りの様子と生活の変化（1時間） ・学校の周りを歩き今までとの様子の違いを見付ける。 ・冬になり生活の様子が変わってきたことについて話し合う。 衣服　食べ物　暖房器具　運動等	

2 お正月の準備 5時間	お正月を前にして，どんな準備をするのか話し合い年賀状を書いたり，身の回りの整理やクラスの大掃除をしたりして，お正月を迎える準備をすることができる。	1　家での準備（1時間） ・家での準備の様子を調べ発表する ・自分のできる仕事は何かを考える。	
		2　年賀状（3時間） ・誰に出すか話し合う。 友達　親戚　この1年間お世話になった人等 ・工夫して楽しい年賀状を作る。	
		3　教室にもお正月を（1時間） ・自分の身の回りの整理整頓をする。 ・教室の中をきれいにする。	机やロッカーの中 教室の壁や窓
3 冬休み 1時間	冬休みの過ごしかたについて話し合い，お正月を迎える心の準備をすることができる。	1　休みの過ごしかた（1時間） ・休みの過ごしかたについて話し合い，計画をたてる。 ・お正月中の過ごしかたについて考える。 挨拶のしかた　お年玉の使いかた遊び等	冬休みの計画表

10　お正月の遊び（全7時間）

附属小学校　2年　生活科カリキュラム　No.10

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 お正月 1時間	それぞれの家のお正月の様子を話し合い，色々な過ごしかたがあることがわかる。	1　お正月（1時間） ・自分の家のお正月の過ごしかたを発表する。 元旦にしたこと 家族の様子　お正月の遊び お年玉の使いみち等	冬休みの計画表 日記等
2 カルタとり 2時間	カルタをもちより，グループやみんなでカルタとりをして楽しく遊ぶことができる。	1　カルタ遊び（1時間） ・家にあるカルタを持ってきて，グループで遊ぶ。	
		2　カルタとり大会（1時間） ・ルールを決めて，カルタとり大会をする。 ・クラスのチャンピオンを決める。	
3 すごろく 2時間	家にあるすごろくを持ちより，すごろくのやりかたやルールがわかり，みんなで楽しく遊ぶことができる。	1　すごろく遊び（2時間） ・すごろくのやりかたを知ってグループで遊ぶ。 ・すごろくを交換しあい，工夫して遊ぶ。	

4 こままわし 3時間	こまのまわしかたを知り，ひもをまいてこまをまわせるようになり，楽しく遊ぶことができる。	1　こままわし（2時間） ・ひものまきかたを知り，まきかたの練習をする。 ・こまのなげかたの練習をする。 ・みんながこまをまわせるようにする。	こまとひも
		2　チャンピオン（1時間） ・だれが一番長くまわすことができるか競争し，チャンピオンを決める。	

11　乗り物（全6時間）

附属小学校　2年　生活科カリキュラム　No.11

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 大垣に行く計画 2時間	乗り物に乗った体験を話し合い，バスや電車に乗って，大垣へ行く計画を立てることができる。	1　乗り物に乗ったこと（1時間） ・乗り物に乗って出かけたことを話し合う。 ・バスや電車の乗りかたについて考える。	
		2　大垣に行く計画（1時間） ・バスや電車に乗って大垣へ行く計画を立てる。 ・乗り物を利用するときに気を付けることを考える。	バスや電車の時刻表
2 大垣へ 4時間	安全に気を付けて，バスと電車を正しく利用することができるようにする。	1　大垣へ（4時間） ・岐阜バスでJR岐阜駅へ行く。 ・運転手さんの仕事を観察する。 ・JR岐阜駅を見学し，駅の説明を聞く。 ・JR東海に乗り大垣へ行く。 ・車内の様子や車掌さんの仕事について気付いたことをメモする。 ・大垣より岐阜駅まで戻り、岐阜バスで学校へ帰る。	学校～大垣間の運賃 メモ帳　筆記用具

12　私のアルバム（全15時間）

附属小学校　2年　生活科カリキュラム　No.12

小単元	目　　標	学　習　活　動	備　　考
1 大きくなった私	生まれてから今までの自分のことを調べ，絵や文に表し，自分の成長に気付くことができる。	1　赤ちゃんのころ（2時間） ・赤ちゃんのころの様子を聞いたり，写真を見たりして絵や文に表す。	写真や赤ちゃんのころの服等
		2　幼稚園のころ（2時間） ・幼稚園のころの様子を思い出して，心に強く残っている出来事を絵や文に表す。	写真や思い出の物等
		3　1年生になって（2時間） ・入学してからの思い出を絵と文に表す。 ・1年時の担任の先生に話しを聞く。	
		4　2年生になって（2時間） ・進級してからの思い出を絵と文に表す。	
2 アルバムの整理 5時間	生まれてから今までの思い出をアルバムにまとめ，こんなに大きく成長したことを喜ぶことができる。	1　アルバム作り（3時間） ・今まで書いたものを見直し，付け加えたり，つないだりする。 ・表紙を付けてとじたりして，アルバムにする。	
		2　アルバム交換（2時間） ・グループでアルバムを交換し合い，友達の成長を認め合う。 ・自分がどのように成長してきたかを紹介する。	
3 お礼の手紙 2時間	多くの人にお世話になって大きくなったことに気付き，感謝の気持ちを表すことができる。	1　お世話になった人（1時間） ・今までお世話になった人について話し合う。	
		2　手紙（1時間） ・お世話になった人に，感謝の気持ちをこめてお礼の手紙を書く。	

〔追　記〕

本稿執筆の動機には，次の様な前提がある。昭和63年・春，新学習指導要領に基づく「小学校科目」として新設を予定される「生活科」を，本学カリキュラムに設ける必要性の是非について「生活科検討委員会」が発足し，「生活概説」「生活科教育」の学生履修の決定を見た。

しかしながら，「生活科」の内容の検討および授業担当者の決定等をも含めて，「生活科研究会」の必要性を認め，平成元年度・春より，本学研究助成金を得て，織田長繁（日本史・社会科教育）・中野力子（家庭概説・家庭科教育）・坂井田節（生物学・理科教育）・志村廣明（教育学・教育史）・松村晴路（法律学・消費者教育）および附属小学校より杉原祥介（カリキュラム）・堤孝彦（第二学年担任）・牧野淳子（第一学年担任）の8名による定期研究会を今日まで継続的に行なって来た。

本稿は，上記研究会から多くの御助言を頂きながら概観・まとめをしたものである。

〔注〕

(1)　昭和46年・中央教育審議会の答申。昭和50年10月・教育課程審議会の「中間のまとめ」。昭和51年10月・同上の「審議のまとめ」。昭和58年11月・中央教育審議会・教育内容等小委員会の「審議経過報告」。昭和61年4月・内閣直轄の臨時教育審議会の「教育改革に関する第2次答申」。そして，昭和62年12月・教育課程審議会の「幼稚園，小学校，中学校及び高等学校の教育課題の基準の改善について」の答申。平成元年3月15日の「学校教育法施行規則の一部改正及び新しい小学校学習指導要領」の告示によって，小学校低学年の教科として「生活科」が新設された。

(2)　昭和50年10月・教育課程審議会の「教育課程の基準の改善に関する基本方向についての経過報告・討議の過程」の流れは，当初は，社会・理科を廃止して，その合科案に移行すると予想されたが，昭和61年4月・臨時教育審議会の答申は，新教科としての「生活科」を設定し，「体験学習」を通して，総合的指導を行ない，社会科と理科も，その生活科の中に統合される形で具体化されたものであるとされた。それは，昭和50年代における全国各地の小学校（研究推進校等）での様々な実践的試行を行なった課題・成果を前提としている。

(3)　永井道雄・近代化と教育・P191以下。

(4)　吉崎祥司・戦後の教育政策と子どもを守る運動（布施晶子・清水民子・橋本宏子編・現代家族と子育て・P186以下参照）。

(5)　協同教育研究会・新体教育史・P63以下。ルソーは「自然の人」と呼ばれる。真の教師は自然であるとして「自然を観察せよ。そして自然が示す道を辿れ」ともいう。

(6)　同上・P88以下。

(7)　鯵坂二夫・岡田渥美編・教育の歴史・P185以下。

(8)　協同教育研究会・新体教育史・P 188 下。

(9)　森秀夫・日本教育制度史・P15以下・P86以下・P125以下参照。

(10)　朝日新聞・昭和59年5月19日付。

参　考　文　献

参考文献
生活科の特色とその実践課題①・東京書籍
生活科の指導計画と指導の実践②・東京書籍
生活科をどうとらえるか1・中央出版
生活科の指導計画2・中央出版
生活科の学習方法3・中央出版
小学校新教育課程の解説・生活・第一法規
新学習指導要領改善の要点・文溪堂
宮脇理・感性による教育・国土社
市川須美子・新学習指導要領の法的検討・ジュリストNo.934
梅原利夫・学習指導要領に教育の未来を託せるか・同上
菊川治・新学習指導要領改訂のねらいと改善の概要・同上
今谷順重編著・生活科の授業を創造する・ミネルヴァ書房
梅根悟監修・世界教育史大系・23・28・36・37・講談社